

建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会
2013 No. 1097

8

特集：グランフロント大阪



時をつくる ところで創る

子どもたちが大人になっていくように、
街も健やかに育っていくと、
そこで暮らすみんなに幸せが広がります。

わたしたち大林組は、
親が子どもたちに愛情を注ぐように、
ところを込めて、建物や街をつくっています。

みんなの未来を、夢のある時間で満たすために。



建築と社会

Architecture and Society

8 | NO.1097 | 2013

日本建築協会

■特集予告

●9月号／素材としての建築

●10月号／建築に携わるものに求められること

今月の表紙

ひろしま美術館

設計：日建設計
竣工：1978年
所在地：広島県広島市



回廊によって切り取られた中庭に円形の展示室。中庭に面しては4つの出入口が設けられているが、正面には庇がない。敷石、芝、空、曲面を描くトラバーチンの壁。囲われた回廊を巡らされる内、喧騒は遠のき、期待感が高まる。建築の力強い造形と優れたコレクションもさることながら、維持管理の質も高く、建築の風合いはいっそう色濃く映る。

(東畑建築事務所／大西広朗)

デザイン：嘉村知紀(東出清彦写真事務所)

撮影：(表紙)

嘉村知紀(東出清彦写真事務所)

(目次)

東出尚子(東出清彦写真事務所)

J a p a n
o f
A s s o c i a t i o n
o f
A r c h i t e c t u r a l
t h e
o f
t h e
J o u r n a l

特集●グランフロント大阪

作品 グランフロント大阪—— 3

本文 ●『グランフロント大阪』～20年間の開発の軌跡と全体計画が
目指したもの、そして『まちづくり』の手法～●岡田耕治 —— 18

1 梅田貨物駅の跡地開発 (1987～)、2 「国際コンセプトコンペ」
(2003)、3 事業コンペ (2006)、4 全体設計のコンセプト、5 設計コ
ンセプト、6 環境計画、7 構造計画、8 防災計画、9 外構・緑化・
水景計画、10サイン計画、11「ものづくりの息吹」と「匠の技」、12
設計体制／「基本設計JV」の発足と「全体統括設計チーム」の編成、
13現場体制／統括監理チームと施工JV総合事務所

●現場統括所長に聞く●羽田野孝男・中尾和昭 —— 28

●インタビュー I

～大阪市が目指した北梅田地区のまちづくり20年～

●岩本康男・北村英和 —— 30

●インタビュー II ～ナレッジキャピタルの創造～●宮原秀夫 — 34

gallery つなぐデザイン●長谷川香里 2

法令コーナー 構造計算適合性判定を円滑に
「よくある質疑事項の解説」発刊●大浦寛登 40

設備の頁 冷房のこれまでとこれから●下田吉之 41

関西の建築界 小澤丈夫●TEO architects 42

群像

再読 千里山住宅地●和田康由 43

関西近代建築

information 企画展 鉤鍛治一確氷健吾の仕事ー フランス国立ク
リュニー中世美術館所蔵 貴婦人と一角獣展、アメリカ
ン・ポップ・アート展、2013 イタリア・ボローニャ国
際絵本原画展、特別展「女性たちの物語」～松園のモデ
ルとなった才女たち～、大野麥風展、医療福祉建築賞2013
募集。 47

月間の動き 平成25年 6 月 55

お知らせ 「名古屋城本丸御殿復元の概要とよもやま&苦労話」 表 3
講演会 開催のご案内



つなぐデザイン

デザイナー
長谷川 香里

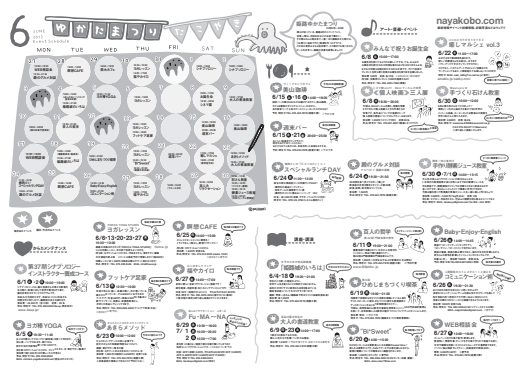
世界遺産姫路城の正面に望むレトロなビルの4階にデザインオフィス「納屋工房」があります。

オフィスの隣の一室をさまざまな人や情報をゆるやかにつなぐコミュニティスペースとして開放して今年で6年目を迎えます。

地元の杉材を敷き詰めた床にテーブルと椅子を配置した、カフェのような約80㎡の空間は時間制のレンタルスペースとして貸出。その場にあるものは何でも使用・移動可能で、自由に使えます。1日カフェ、音楽イベント、講座・講演、ミーティング、パーティ、落語や演劇公演など様々なイベントに、年間約600回利用されています。最近はヨガやマッサージなどのからだメンテナンス系イベントが特に増加中。厳しい規則や飲食に関する制約、有料イベントの際の追加課金などがないうえ、使える備品が多いため、何かをやってみたいと思った人が、自由な発想で気軽にイベントを実施できるのが魅力です。空いた時間はコーヒーやハーブティが楽しめるカフェにもなります。

人と人をつなぐ、人から人へとつなぐ空間として、町の魅力の発掘発信の場であり続けたいと考えています。

長谷川 香里（はせがわ かおり）
1998年 甲南女子大学卒業
1998年 東光電気工事株式会社
2005年 納屋工房 設立
2008年 事務所移転を機にコミュニティスペース開設





GRAND FRONT OSAKA / 2013



グランフロント大阪

2013年4月26日、「まちびらきの時」を迎えたグランフロント大阪は、開業以降の1か月間に、実に760万人の来街者を受けとめた。長年にわたる関係者の想いと、オープンを待ちに待った人びとの期待を乗せて、ここから未来が生まれ、大阪が変わる。今、時代が動き出そうとしている。





- 左上／「住まう」「憩う」場所にふさわしく、アースカラーの自然の材料を纏ったタワーCとオーナーズタワー
- 左／純白のアーキテクチュラルコンクリートを基壇に高く聳えるタワーB
- 右上／エンブレムも誇らしく輝かせるタワーA
- 右中／紺碧の天を衝くフランフロントの群像
- 右下／巨大なタワー群のまちにあって人間らしさをしっかりと持たせるために、豊かな緑がある









■■■■うめきた広場・うめきたSHIP

- 左／夕暮れの広場。喧噪の一日が無事終わるころ、人々はここへ来てしばし憩いの時間を楽しむ
- 上／駅直結の正三角形1haの敷地に66×44mの楕円プレートが浮かぶ
- 下／大きくゆるやかな弧を描いたカスケードが、光と風と水音を広場の地下に導く





■■■■■南館・タワーA／

- 左／連子格子を模したPCを纏った、ラウンドフォルムが特徴的な南館
- 右／タワーAデザインのハイライト、自然換気のためのエアインテーク
- 右中／しっとりとした重厚感を醸し出すタワーAオフィス9階スカイロビー
- 下／暖かな光とともに南館の賑わいが表出する。夕暮れ時の賑わい軸のケヤキ並木とA-B間デッキを人々が行き交う





■■■■北館・タワーB／

- 左／屋上庭園とつながり明るく開放的なタワーBスカイロビー
- 左中／「創造のみち」に1、2階で接続するタワーBオフィスロビー
- 下／北館屋上庭園。さまざまなデザインボキャブラリーがぶつかり合う
- 右／賑わい軸のケヤキ並木より見上げる。外周部にガラスが透けて見えるところが、自然換気のための重力換気塔の役目を果たす「コーナーヴォイド」







■■■■南館～北館『創造のみち～ナレッジプラザ』／

■上／南館導入部の迫力ある半屋外空間と、象徴的な柱『ウィッシュボーン』。『創造のみち』はここから始まる

■下左／北館『創造のみち』の導入部。6層吹き抜けの高い天井はタワーBのボトム。右手の平行に設置したエスカレータが一気に屋上庭園へと人々を導く

■下右／『創造のみち』の北端。ガラスの向こうに自然の森『ザ・ガーデン』、そして『オーナーズタワー』が見える

■右／1,000㎡×7層吹き抜けの大アトリウム、『ナレッジプラザ』では、ナレッジキャピタルを構成するフューチャーライフショールームの数々が顔を見せ、様々なイベントが催される



THE 世界一展
2013年4月26日
-5月1日 開幕

THE 世界一展
THE WORLD'S FIRST EXHIBITION

The Lab.
Cafe Lab.



■■■■■タワーC・オーナーズタワー／

■左上／「住まう」「くつろぐ」がまちの構成要素のひとつになっているのが特徴でもある。アースカラーを纏い安らぎを提供する二つのタワー

■左下左／敷地北端に位置する『グランフロント・オーナーズタワー』。デザインコンセプトは「オーセンティック・モダン」

■左下右／タワーCは上層階にホテル客室、下層階にオフィスを持つ。ピンストライプの花崗岩打ち込みPCによるデザインがシャープな印象をつくる

■■■■■水のある風景／

■右／北館の西側を流れる水景とコリドール空間『せせらぎのテラス』

■右中左／南館とうめきたSHIPの間を、広がりながらカスケードへと続く水景

■右中右／北館とオーナーズタワーを四季折々に彩る自然の森『ザ・ガーデン』





『グランフロント大阪』

～20年間の開発の軌跡と
全体計画が目指したもの、
そして「まちづくり」の手法～

日建設計
岡田耕治

1965年 兵庫県生まれ。
1990年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
後、日建設計入社。
現在、設計部門設計部長。

「関西再生」を目指した大阪駅北地区先行開発プロジェクトが本格的に始動したのは2006年に行われた事業コンペからであった。コンペ提案は、基本設計～実施設計を経て「より確かなまちの骨格と仕組み」を持ち、肌触りと色合いを深めてきた。

『グランフロント大阪』の設計コンセプトの「原風景」ともいえる事業コンペ案『創造の宮』が目指した「まちづくり」とはどのようなものだったのか。開発の全貌を振り返りながら、このまちが目指した全体計画とその手法を総括したい。

■■■■■ 1 梅田貨物駅の跡地開発（1987-）

「関西最後の一等地」といわれた大阪駅北側貨物ヤード。JR大阪駅側を南の一辺とし、北は中津まで伸びる三角形のこの土地の広さは24haといわれ、甲子園球場に置き換えると6つ分がすっぽりに入る広大な面積をもつ。国鉄時代に日本の流通を支えるべく1928年に竣工した梅田貨物駅は、昭和30年代の後半までは堂島川ともつながる掘割をもち、鉄道と海運が一体となって大阪の物流拠点としての役割を果たしてきた。多くの国内の貨物駅はその都市の中心駅から一駅ないしは数駅離れて計画されることが多いが、大阪駅の場合は旅客駅と接して貨物駅が構築された。このことが本計画敷地のポテンシャルを極めて高いものになっているゆえんである。



昭和30年頃には駅南西まで線路が延び
堂島川とつながった掘割が見える

JR民営化がなされた1987年、全国的な動きの中で梅田貨物駅もその機能を近隣の吹田貨物駅に移転させることとなり、それを受けて90年代初頭には「メディアシティフォーラム」構想が上がったことがある。この計画は現在の街区割とは全く異なるものであったが、全体敷地の中央付近に在阪の放送5局を集結させてメディアセンターとし、駅のすぐ北側には商業ゾーン、その西側にオフィスなどの業務ゾーンと文化施設、また敷地北寄りにはメディアセンターを支えるプロダクションや創造拠点、そして最北端にはホテルを、というものであった。しかし吹田側の住民による反対やバブル経済の崩壊もあり、いったん再開発の火は消えかかり、梅田貨物駅はしばらく存続となる。



中津上空より俯瞰した昭和60年頃の梅田貨物駅
開発の手は全く入っていない

旧国鉄大阪鉄道管理局（民営化後のJR西日本本社）が先行して建て替えを行い、この地に再開発に向けた新たな一歩を記したのが1992年。その跡地はいまや一日10万人が訪れると言われるヨドバシ梅田となっているが、土地の入札が行われたのは1997年のことである。そして同じころ、梅田北地区のこれからのあり方を議論するフォーラムや懇談会がいくつか立ち上げられている。それらのうちのいくつかは今日につながる大切な視点と具体内容をレポートとして纏め上げ、府・市・経済界のトップに提言し、のちの大阪駅北地区先行開発区域——今回グランドオープンした『グランフロント大阪』——に向けての大きな流れをつくることとなった。

■■■■■ 2 『国際コンセプトコンペ』 (2003)

もうひとつ忘れてはならない出来事がある。先述のいくつかの提言を基礎として、「この土地に描くべきまちのすがた」を世界中からあまた募集しようと2002～03年にかけて行われた「大阪駅北地区国際コンセプトコンペティション」の開催である。これは当時の都市整備基盤公団（現在のUR都市機構）日本鉄道建設公団（現在のJRTT）、関西経済連合会、大阪商工会議所、大阪府、大阪市の主催したもので、世界各国より全966作品の応募があり、優秀賞3点、佳作5点が選出されている。

この時のコンペ応募要項には今回の『グランフロント大阪』の開発敷地となった先行開発区域（当時は6haと記されている）を図示したうえで「2003年度末に日本鉄道建設公団において用地売却が予定されている区域で、先行して開発が可能となることを前提に提案を求める」とあり、それを前提に貨物ヤード全体である24haのデザイン提案を求めている。

この時に選ばれた優秀3点に共通しているのは「総合的提案であること」、「実現性または事業性が高いこと」、「水都再生を提案できていること」。いずれも優れた提案であり現実性が高く評価されているが、一方で「水都大阪の再生」にも高い評価が付けられている点が興味深い。

また優秀作に選ばれたひとつは日建設計案『Metropolitan Compost～平成のまちづくり～（応募者は当時的大阪代表 林直樹）』で、引き続き開催された事業コンペにおける計画案の「原風景」となった提案である。

■■■■■ 3 事業コンペ (2006)

『大阪駅北地区国際コンセプトコンペティション』の結果は次のステップに活かされることになる。入選提案のアイデアを活かし、時の關淳一・大阪市長を会長とする『大阪駅北地区まちづくり推進協議会』が立ち上げられ、議論を踏まえて2004年7月に大阪市の『大阪駅北地区まちづくり基本計画』として取りまとめられるが、これがのちの事業コンペティションにおけるまちづくりの計画与件である5つの柱としてコンペティターたちに示された。

- ①世界に誇るゲートウェイづくり
- ②賑わいとふれあいのまちづくり
- ③知的創造活動の拠点（ナレッジ・キャピタル）づくり
- ④公民連携のまちづくり
- ⑤水と緑あふれる環境づくり

2005年も年末差し迫ったころ、いよいよ事業コンペティションの応募要項がまとまり、本格的に関西再生のために、この地の再開発の火がふたたび燃えはじめようとしていた。国鉄民営化から、実に19年間で過ぎていた。

【二段階に分けて行われたコンペ】

2006年に行われた先行開発区域の事業コンペは同年5月に行われた前半戦と、10月に行われた後半戦のふたつによって7ha全域の開発事業者を決定した。前半戦では先行開発区域のうちのBブロックの開発事業者を特定するというものであった。

前半戦のBブロックには「ナレッジキャピ

タル」を創造することが決定しており、大きく3つの課題によって構成されていた。

- ①梅田北ヤード24haのマスタープランを提案せよ
- ②そのうち先行開発区域7haについて、詳細なまちづくり提案をせよ
- ③さらにBブロックにおける中核施設である『ナレッジキャピタル』の具体提案をせよ（運営を含む）

というものであった。後半戦では、先行して特定したBブロックの開発事業者による案が前提としたうえで、残る他の街区（北口広場、Aブロック、Cブロックの3つの街区）の開発事業者を特定した。

4つの事業チームが参加したコンペティションで、前・後半戦ともを制したのが『創造の宮』と銘打った提案で、のちに『グランフロント大阪』全域を開発した開発事業者チームによる提案であった。そして彼らとともに戦った我々計画・設計チームのメンバー（日建設計、三菱地所設計、NTTファシリティーズ、大林組、竹中工務店）が結果として最後まで設計者としてこのプロジェクトにかかわることとなった。

事業コンペ時点では容積率等は指定容積を守ることを前提としており、北口広場、Aブロックは800%、BおよびCブロックは600%。のちに都市再生特別区域（以下、都市再生特区）の適用を受けた現在のボリュームとはかなり異なる様相ではあり、街区構成も若干の違いがあったが、まちを構成する主要な用途や大きな組立てはこの事業コンペの提案をほぼ踏襲したものといつてよいと思う。



日建設計が提案した『Metropolitan Compost』。大阪ならではの「ものづくりの文化」を育て、発信する緑と水景が敷地を豊かに彩り、現実性の高い案であるとの評価を得た

■ 4 全体設計のコンセプト

基本設計段階で、『グランフロント大阪』の今のかたちを組み立てた。都市再生特区を適用した容積率上限は、域外貢献、都市景観、区域内の用途ごとの規模、吹抜けやアトリウムをつくり方、屋上庭園における回遊性、緑化や水景の整備規模、夜の景観、環境配慮技術を駆使しCASBEE＝Sランク取得など、様々な視点からの検討を行った結果、Aブロック＝800%→1,600%に、B・Cブロック＝600%→1,150%となった。これを受け、基本設計フェーズでは全体規模の見直しを図りながら、事業コンペでの提案をベースとした設計コンセプトを熟成していった。

■ 『創造のみち』～超大型面開発を

「まち」と「ひと」のスケールに「まち歩きが楽しいまちづくり」の実現のために、グランドレベルおよびJR大阪駅と直結する2階レベルを基軸とした計画とした。先行開発区域の中心を南北に縦断する、歩行者のためのコンコースである『創造のみち』をつくることを提案した。そこから派生する「細街路」により外周歩道と随所でつなげることで、巨当面開発でありながら通常の街区スケール感をつくり出そうとした。

■ 『伝統と風格ある顔づくり

～風格あるシンボル軸・西側立面』

開発区域の南北の主道路『シンボル軸』には、大阪の都市計画の範といえる御堂筋に敬意を表し、イチョウ並木を両側に3列ずつ植える提案とした。建築後退5mを含めると計50mの緑豊かなメインストリートが出来上がる。賑わい施設である低層部はこの『シンボル軸』に面した側を正立面とし、軒高さをSGL+45mとして各街区とも揃えることで「伝統と風格ある顔づくり」を目指すものとした。

■ 『既存街区との調和

～東に隣接する芝田町側立面計画』

西側低層部の高さ45mに対し、31mのビルが割捨する隣接芝田町側はできる限り軒高さを下げ、街並みとスケール感が馴染むようにセットバックさせる提案とした。そして隣接街区が将来「緩やかに開発されること」に期待を込めた。

■ 『大阪のシャゼリゼ通りを目指す

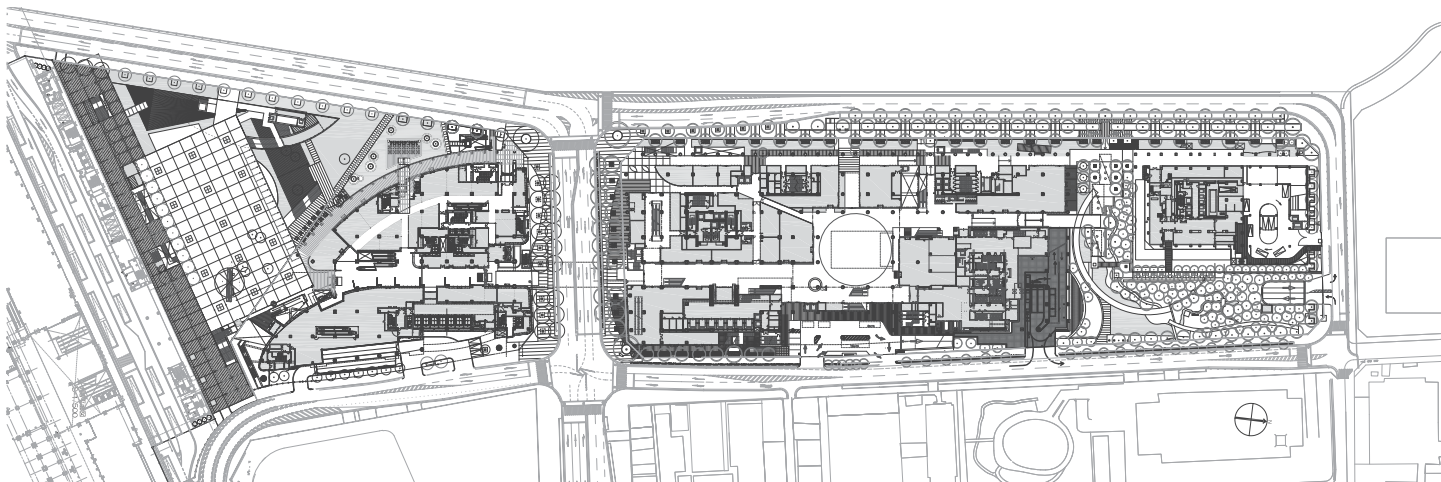
～A、B両ブロック間の東西道路』

東西のメインストリート『賑わい軸』に面しては建築後退がなく道路境界ぎりぎりまで建築が可能であることを受け、低層部路面店

からの「しみ出し」をうまく公共歩道と融合させ、人々が談笑するシーンが外構空間において常に感じられるものにしたいと考えた。真夏でも茂った葉が風にそよぎ涼しげな木陰空間をつくり出してくれるケヤキの2列街路樹を提案した。

■ 緑豊かな『自然軸』の提案

1900年代初頭に北野中学（現在の府立北野高校）をはじめとしていくつかの学校が移って来ているこの場所は、淀川河畔から続く湿地帯であり、自然の風景や水路が残る場所であった。近代以降は貨物ヤードをはじめ工場などが立ち並んだが、現代に入り1993年、ようやく西側に『新梅田シティ』によって再開発がなされた。ここには『中自然の森』という豊かな緑に包まれた場所がつくられ、以降は人々に潤いをもたらす存在として親しまれていた。また東側芝田町にあるJR西日本本社と弥生会館の間にある一角にもクスの大木をはじめとしたこんもりとした森の公園がある。この東西二つの森を結び、『賑わい軸』と並行する新たな軸線として『自然軸』として提案した。街路樹での緑化ではなく、かつての面影を取り戻すべくしっかりと幅員を持った「森」によって、もうひとつ新たな東西軸線をつくることを目指した。



■ 上図／基本設計完了時点の先行開発区域全体配置図

骨格は概ね現在の完成形と近いものだが、いくつかの大きな点が異なっている。北口広場には大階段や楕円プレートがなく、『うめきたSHIP』の1階もカフェよりピロティ空間としての性格が強かった。また北館は南西交差点からナレッジプラザへ向けて斜めに通路が通っていたり、ホテルエントランス車寄せの考え方が違っていたりしていた

■ 左図／基本設計の頃の南館⇄北館デッキ

南館と北館を結ぶデッキの構造も今のものとは若干違っており、当時は両端上弦材から吊材をカタナリーに垂らすように渡し、屋根面には藤棚を設けようとしていた





■上左図／基本設計時のナレッジプラザ

大空間をぐるぐる回りながら上昇するエスカレータ動線もこの頃の発案。ガラス屋根はその後イベント向けに吊物機構などが設置しやすいようフラット形状に変更した

■上右図／街区全体の東立面パース

タワーはほぼ最終形に近いものとなっているが、東面低層部はデザイン的にまだこなれていない。実施設計フェーズで現在のものに近づけていった

■右写真／基本設計模型

3事務所合同設計室の中央に鎮座した1/200の全体スタディ模型



■『水景』そして『都市回廊』

「なにわ八百八橋」を現代に甦らせることをまちづくりのコンセプトの背骨のひとつに据えた。イチョウ並木の『シンボル軸』沿いに南北500mにおよぶ川筋をつくり、そこに橋を架け、大阪の歴史へのオマージュが日常の風景となることを目指した。また川筋に沿って『都市回廊』と名付けた連続したコリドールをつくることで、グランドレベルにおける建物の威圧感の低減と、一層豊かな空間を生みだそうとした。そしてその水景は北口広場に拡がりながら流れ着き、カスケードとなって地階の空間に自然の光と風を導く仕掛けとなる計画を提案した。

■まちの群像をつくる～「起承転結」が

4つのタワーデザインのキーワード

まちの外観、すなわち「景観そのもの」を形づくる4つのタワーは、南側から大型オフィスが二棟、プラザを境に北にはホテルタワー、最北にはタワーマンションとしているが、本計画はBブロックの中ほどに位置する『ナレッジプラザ』を中心とし、南側と北側に大別できる構成をとることとした。

南の大型オフィスタワー二棟は「先進性を感じるもの」を意識して前面ガラスファサードとし、ツイン性を持たせた。同ボリューム

とし高さを揃え、ガラスやサッシュ色なども共通で計画した。そして環境要素技術を視覚化し、それがタワーデザインそのものの特徴となるものを目指した。

一方北側のふたつのタワーはホテルや住宅であり、人間の日常の営みを受けとめる趣が必要であった。「住まう」「泊まる」「寛ぐ」「安らぐ」。そのため柱や梁、壁といった要素を表出させ、それらを自然の風合いある素材で仕上げアースカラーとして、ここで人々が安心して生活できるものをつくろうとした。

4つのタワーは南から「起・承・転・結」というリズムで構成した。「転」にあたるタワーC（上半分がホテル・下半分がオフィスの複合タワー）が全体のリズムに変化を与える。そして最北端のタワーマンションで全体を「結ぶ」。全体配置においても3本目のタワーCは他の3本と異なりその立ち位置を東寄りにとっているが、これはホテル客室とマンション住戸との視線の干渉をできる限り避けた配置計画でもある。

■低層部の内部空間

～「立体的商店街構想」における動線計画

多くの来街者が訪れる内部の空間は、AブロックからBブロックへと続く『創造のみち』と『ナレッジプラザ』を軸とした「立体都市」

を目指した。そしてグランドレベルだけでなく多層に積み重ねた広大なフロアに密度高く軒を連ねるショップやレストラン、ナレッジキャピタルを隅々まで、隈なく楽しんでいただけの動線計画を志向した。A、Bブロックとも目的がはっきりしている飲食フロアを最上階に配置し、降下時の「シャワー効果」の期待と併せた計画としている。そしてわかりやすく効率のよい縦動線の主力手段としてエスカレータ計画を重視した。わかりやすい位置にメインルートを設け、サブエスカレータ動線やエレベータによる縦動線は、適度な離隔を取りながら配置している。

■吹抜け空間、外部の風景が感じられる

建物内の「庭」、そして屋上庭園

巨大な床面積を持つ両ブロック低層部は、動線のわかりやすさもさることながら、実寸の断面パースを見ているような感覚で空間を「見て、楽しんでもいただく」ことを重視した。水平移動には見通しの良い通路を配し、結節点付近には随所に「建物内にある庭」のようなスペースをつくり、窓を穿って外光を入れたレストスペースとしている。この「憩いのスペース」づくりは、グランドオープン以降老若男女を問わず大変よく利用されていることから目的を達していると言えるだろう。

5 設計コンセプト

北口広場／

『うめきた広場・うめきたSHIP』



正三角形・1 haの敷地は、パースペクティブな広がりを持つ独特の場をつくっている。開発区域北辺から500mにわたって流れてきた水景は、この広場でカスケードとなり、ダイナミックな滝の音を響かせる。安藤忠雄建築研究所との協働で果たしたオーバルの広場を中心に据え、駅ビルと『南館』、そして『うめきたSHIP』の三つの建築が、解放感と適度で居心地の好い「囲まれ感」を醸し出す。オーバルの床面に仕込まれた霧の彫刻「SEA FOG（中谷芙二子＋高谷史郎作）」やサクラの群植、500灯を超えるマーカーライトにより、四季折々・時々刻々とその姿を変え、ゆったりとした時間の流れをこの「喧噪の街・大阪」につくり出す。

独特のフォルムを持つ『うめきたSHIP』は構造計画・環境配慮技術の導入のハイライトで、プロジェクト中は「シンボル建物」と呼ばれた。無垢のスチールの柱が捻りながら連続的に建ち並び、その間をつなぐLow-Eガラス面に映り込むまちの姿がこの広場でイベントを楽しみ、腰を下ろし笑顔で談笑する人々を見守っている。

（塚島健／日建設計）

Aブロック／

『南館』『タワーAオフィス』

南館とタワーAは大阪駅に面した『グランフロント大阪』の顔。まち全体の統一感を保ちながら外・内装の一部に曲線・曲面やオーガニックなフォルムを用いて柔らかな印象を持ったものとしている。

約200の店舗で構成される低層部『南館』は外壁を大きくカーブさせ、全体を堅リブ付きアーキテクチャルコンクリートによるPCで、また駅に向けた導入部の半屋外空間には

アルミキャストによるルーバー、ガラスなどを用いて「上質さ」と「品格」を表現。まちのエントランスゾーンとして期待感を抱かせる空間演出を大切に、大阪駅2階デッキからアプローチする正面には『ウィッシュボーン』と名付けたシンボリックでダイナミックな柱が訪れる人々を迎える。そして夕暮れ時には内部の多様なアクティビティが煌めく光の演出とともにあたたかな表情で透過し、人々を『グランフロント大阪』へと誘う。

内部空間は『創造のみち』を軸とし、わかりやすい位置にエスカレータを配して垂直への主動線を組むと同時に、その近傍に変化に富んだ吹き抜けを設けて垂直移動中に上部や下部の空間が連続して視界に飛び込んでくる。商業フロアの通路は外壁のラウンドフォルムに合わせて曲線を描くことで、歩きながら「その先にある期待感」を感じられるものに。これらの空間構成を、天然石やアルミニウムをはじめとする金属、GRC、質感のあるタイルなどの材料を用いて仕上げている。また照明計画においてもスポット系のライティングによる光溜まりをつくることで、より印象的でエレガントな空間とした。



上部に聳えるタワーAは純オフィスビル。大阪国際空港の進入制限いっばいまで建てたこのタワーは一辺が61.2mの正方形平面で、約90,000㎡の床面積を持つ。超大型貸オフィスビルとしては画期的な自然換気システムの導入をはじめとした環境配慮技術を採用入れている。特に外観の特徴ともなっているアルミキャストの外気採入口「エアインテーク」は、自然換気の視覚化としてだけでなく、タワー

ボディ各面の中心軸に寄せて多層化したデザインとすることによりビルディングをスリムに見せている。

オフィス基準階はセンターコア＋「ロの字」執務室。奥行約15mのオフィスは小規模テナントにも柔軟に対応。そしてオフィスの顔となる9階スカイロビーは低層部屋上庭園と一体的に造り込み、吟味した素材を用いたインテリアを持つ空間は高級感ある上質な「大人の空間」を実現している。

（西堀正樹、鳥羽総一郎／三菱地所設計）

Bブロック／

『北館』『タワーBオフィス』

Bブロックは約100m×190mの平面形を持つ低層部『北館』の上部に『タワーBオフィス』と、オフィス＆ホテル・レジデンスが複合した『タワーC』が並び建つ。



『北館』は、館内の主動線となる『創造のみち』や『ナレッジプラザ』に大きな吹き抜けをつくり、どこにいても空間全体が感じられるものに。単一の巨大商業施設的なものではなく、「いくつかのビルディングが寄り集まったような」構成をとる。主動線上の吹き抜けから上層階や屋上庭園への道筋が一見して分かるようにエスカレータ動線を組み込んだ。『ナレッジプラザ』はガラスのトップライトにより明るく広い大空間だが、ガラス越しに見える屋上庭園の緑は人々に回遊の楽しさと期待感を感じさせる。デザインは新しい時代を切り拓く場に相応しく「エッジの効いた」「刺激を感じられる」もので外・内観ともつくりあげている。

『ナレッジキャピタル』は、人がつながって未来をつくる、知的エンターテインメント大空間であり、産官学の知的創造交流拠点。「知る」「驚く」「学ぶ」「あそぶ」「輝く」を通して人々がここに集い楽しみ体験することがで

きる空間づくりと施設展開を図っている。プラザを取り囲むように配置した体験型イベントラボやショールームは、商業店舗と混在させることで一般来街者が見て歩きを楽しめるよう工夫し、カフェやレストランも多く併設することで長時間滞在型を志向。ビジネスユースには、分野を超えた出会いと交流により新たな価値創造を目指す会員制の『ナレッジサロン』、数名単位での入居に向けた52室の『コラボオフィス』、オフィスワーカーをはじめとするミーティングスペース『カンファレンス』部門、産官学の大規模テナント向け『ナレッジオフィス』を用意。また芝居上演や講演会向けの381席の『ナレッジシアター』、1,700㎡の大ホールを軸とした『コンベンションセンター』など、複合した機能が総合的に「感性」と「技術」の融合を「新たな知的価値創造の場づくり」へとつなげていく。



タワーAと双壁となるタワーBは、関西を牽引する象徴的なオフィスビルとして先進性を感じさせるものに。低層部との調和を図った外・内観ともエッジの効いたデザインと最新の環境配慮技術が高い次元で融合。タワーボディのコーナー部分を透明感溢れるガラスだけで構成した「コーナー・ヴォイド」はオフィスフロアの自然換気システムにおける重力排気塔であり、年間中間期の約半分が風速2m以下の梅田地区においてフルタイムで良好な自然換気の状態をつくり出す。また夜のシーンでは細く軽やかにタワートップに駆け上るように架けたL字型の梁がライトアップされ、タワー全体が印象的に浮かび上がる。インテリアにはアクティブな『ナレッジキャピタル』を擁する『北館』のタワーオフィスにふさわしく、ヴィヴィッドなレッドをテーマカラーとしてあしらい、「情熱とクールが行き交うキャラクター」を与えている。

(田中公康、見杉亮誠、松本泰彦／日建設計)

Bブロック／

『タワーC オフィス&ホテル』

タワーCは、高層部がホテルとサービスレジデンス、中層部がオフィスとカンファレンス、低層部がホテルおよびオフィスの共用部という機能構成。それぞれの機能を外観に表出させながら、一体感あるタワーとしている。外装は隣接するタワーマンションとの視線干渉への配慮や適度な日射遮蔽を行い、快適な室内環境をつくり出すために、花崗岩打込みの縦りブPCを細やかに全体に纏う。足元から頂部までを同一の花崗岩で仕上げ、独立感ある存在を狙った。

オフィス部は、ホテルフロア中央部を貫くテクニカルボイドを利用した重力式自然換気システムを採用している。高低差の大きな煙突効果により、効率的な自然換気を実現。またベース照明を温白色（色温度3,500K）としホテルフロア照明との調和を図り、夜も一体感あるシルエットをつくっている。

ホテルフロアは国際第一級に相応しい客室フロンテージを確保するために、中層部のオフィスとはタワーC中ほどにある構造ベルトラス階で柱を載せ替えて外周柱スパンをずらし変えている。ホテルメインエントランスは専用の車寄せを建物東面に設けることで際立った存在感をもつ。花崗岩の割肌は落ち着きと格式を感じさせ、エントランスまわりを包み込むように配置した「水と緑豊かな庭園」を借景とし、日本の四季折々の風景を世界の人々に楽しんでいただこうとした。



(小川克憲、外尾政信、松本浩二／NTTファシリティーズ)

Cブロック／

グランフロント大阪オーナーズタワー

先行開発区域において唯一「人が住まう」場所。525戸のタワーマンションは、全戸が分譲となっている。こういった超大型面開発においては開発あるいは運用上の条件の違いに



より、全体開発の文脈から「独立した」形態やデザインとなってしまうことが多い中、『グランフロント大阪オーナーズタワー』では街区全体のデザインコンテキストとコードづくりの段階から常に一体感が成り立つものとしている。他ブロックと同様、低層部にあたる地上45mには基壇をつくり表情線のラインを統一、大阪駅から開発区域の西面足元に500mにわたる水景とコリドール空間『都市回廊』を連続。共用部の「自然換気システム」の採用と視覚化、ライトアップ時の「夜のシルエットづくり」などにおいても常に街区全体の中で調和と独自性を両立させている。

タワー外観はシンメトリカルな4面正面ファサードを3層構成とし、力の流れが明快に感じられる安定感のあるフォルム。隣接するタワーCと同様にアースカラーの自然な風合いの素材を外装に用いることで、「住まいとしてのホスピタリティ」の表情を意識、街区に人の息吹を添えている。共用部の自然換気や自然採光のためにつくったタワー中心軸上の『スカイスリット』による彫りの深さや「光と影」がつくり出す繊細な表情により、従来のアウトフレーム建築から一歩進んだ超高層住宅としての表現に挑戦した。

プランニングおよび空間のクオリティには最上級のホテル計画とオペレーションの思想を反映し「ホテルそのものに住まう」をメインコンセプトに。本質的な心地好さと、都心居住における新しいライフスタイルを志向。

住まいの基本性能として単独でCASBEE/Sクラス相当の環境配慮と「SI＝スケルトン&インフィル」を有する。免震構造を採用しており、災害時・緊急時には住宅における基本生活を維持するLCP＝Life Continuity Planning)を実現している。

(田口重裕、石井邦彦／三菱地所設計)

「すべての街区が同時に、同一事業者によって
つくられたまち」である強みを生かした、総
合的環境配慮への取り組み

また本プロジェクトの中核施設であり中心的役割を担う『ナレッジキャピタル』では、その運営組織であるKMO（ナレッジ・キャピタル・オーガナイゼーション）を中心に、産官学が協同して環境配慮型ライフスタイル・ワークスタイルの提案や実証実験を行うこととなっている。これらTMOやKMOの活動を通じた取り組みに加え、建築計画においても機能やデザイン面で工夫した「パッシブ手法」や、実効性の高い「アクティブ技術」を積極的に導入し、ソフト・ハードの両側面において広く社会に環境意識を高める情報発信を続け、「環境ショーケース」となりうるものを目指

複数街区での一体的な水景・緑化計画によるヒートアイランド対策を講じ、エリア全体での一体的な環境性能評価を実施した。具体的には、外構緑化・屋上緑化・街路樹植栽整備・水景整備・地中熱利用・タワー最頂部潜熱排熱などである。

また「アクティブ技術」では、高効率熱源機器の採用・ハイブリッド空調・放射冷暖房・太陽光発電システム・LEDおよび高効率照明機器の採用・光センサーによる照度制御・太陽追尾ブラインド協調制御・雨水再生水利用（一部は街区を越えて水融通を行っている）などがあげられる。

運用段階における省CO₂活動を促進し、

事業者の活動だけではなく、環境配慮成果の得点化、表彰制度など、省CO₂に積極的に取り組むテナントへのインセンティブ提供や、省CO₂活動に関する積極的な情報発信を行う

4つのタワーにはそれぞれの利用特性に応じた環境配慮のパッシブ手法を組み合わせて、快適性と環境性の両立を図ったデザインのものとしている。特に「自然換気機能」の一部を外装デザインで表現しており、これが各棟の意匠のアクセントともなっている。

(高山真／日建設計)

Figure 1 illustrates the BEMS network system architecture, showing the integration of various sustainable technologies across multiple district areas and building towers.

複数街区一体での水と緑のネットワークの整備

- ・屋上緑化
- ・街区緑化
- ・水景ネットワーク など

実効性の高い省CO₂技術の採用

- ・自然換気
- ・高効率熱源
- ・太陽光発電 など

持続的なマネジメントシステムの構築

- ・TMOによる省CO₂マネジメント活動
- ・各街区のBEMSを一元化するネットワーク など

システム構成:

- スカイスリットによる通風換気:** オーナーズタワー
- センターボイドによる重力換気:** Cタワー
- コーナーボイドによる重力換気:** Bタワー
- エアインテイクによる通風換気:** Aタワー

各タワーの機能:

- オーナーズタワー:** LED照明 (共用部), 再生水利用 (雨水), BEMS
- Cタワー:** 屋上排熱, 屋上緑化太陽光発電, 自然採光, 外気導入量制御, 再生水利用 (雨水・排水), BEMS
- Bタワー:** 屋上排熱, 高性能ガラスブラインド制御高効率空調システム, 屋上緑化太陽光発電, 自然採光, 外気導入量制御, 高効率熱源, 再生水利用 (雨水・排水), BEMS
- Aタワー:** 屋上排熱, 屋上緑化太陽光発電, 自然採光, 外気導入量制御, 高効率熱源, 再生水利用 (雨水・排水), BEMS

ネットワーク:

- 水と緑のネットワーク
- BEMSネットワーク

建物名称: 北館, 南館, 北口広場



タワーA、タワーBとも環境配慮技術、特に自然換気システムを視覚化したデザインとしている

■■■■ 7 構造計画

『南館』『北館』とタワーA、B、Cの構造

Aブロック『南館・タワーA』およびBブロック『北館・タワーB・タワーC』は、いずれもそれぞれ用途の異なる低層部と高層部から構成されている。南館はオフィスタワーとなる高層棟（タワーA）の下部に商業施設となる低層部が広がり、北館は低層部の上部に高層棟が2つ位置するツインタワー形式でオフィスタワーとなる高層棟（タワーB）とホテル、オフィスタワーとなる高層棟（タワーC）の下部にナレッジをコアとした商業施設、コンベンションセンター、シアターなどが複合する低層部が広がっている。景観計画上、低層部の軒高は45mで統一されており、超高層部は『タワーA』が高さ179m、『タワーB』が高さ175m、『タワーC』が高さ154mである。

タワーAおよびタワーBは高層棟のオフィスと低層部の商業・ナレッジ部分が異なる基準スパンとなっており、タワーCは高層部のホテル階とその下部のオフィス階で基準スパンが異なる。この解決策として設備機械室階となる中間階にベルトトラスを配置し、このベルトトラス階で柱位置の切り替え乗り換えを行う計画とした。ベルトトラスは建物頂部に設けられているハットトラスと併せて建物全体の曲げ変形を抑制し、高層部の剛性を効率よく確保する効果も期待して配置している。

高層部および低層部には地震時におけるエネルギー吸収制振部材として『南館』には座屈拘束ブレースおよびオイルダンパーを、『北館』には座屈拘束ブレースを、主にコア周りに配置している。高層棟上部をホテル用途としているタワーCの頂部には風揺れによる居住性改善の目的でアクティブ・マス・ダンパー（AMD）を設置している。

タワーA、B、Cとも高層オフィス階の柱ピッチは7.2m、長手方向のスパンを18.6mとして計画している。基準階柱断面は800角の溶接4面ボックス柱、18.6mスパンの梁部材は900せいのH形鋼を用いている。軸力の大きい柱にはCFT造（Fc42～Fc80）を採用した。ツインタワー形式となる北館は8階床で全体が構造上一体化する計画としており、地震時に床面に生じるせん断力が大きくなる部分は鋼板による床補強を行っている。

基礎は場所打ちコンクリート杭基礎であり、低層部分は地表から約31mの第一洪積砂礫層を支持層とし、高層部分は地表から約49mの第二洪積砂礫層を支持層として計画した。また軸力の大きくなる高層部分の杭は第一洪積砂礫層の深度の中間位置に節形状を有する多段拡底場所打ちコンクリート杭を採用した。

本建物は地下3階で基礎底は地表面から約18mとなり、山留にTRD工法を用いている。建物外周で高層棟の大きな軸力の影響を受け

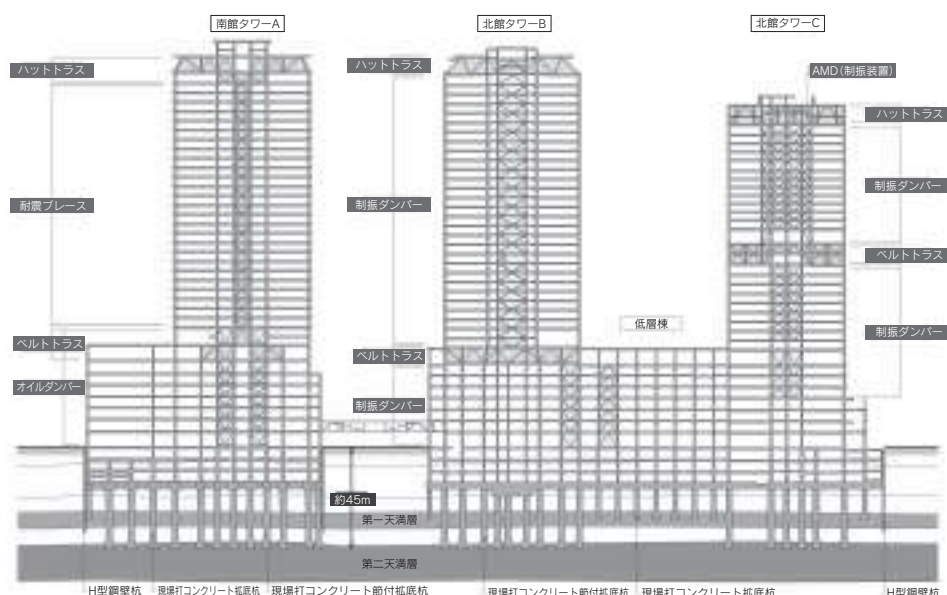
ない範囲はこのTRD工法を本設杭として本設利用している。TRD工法の本設杭としての採用にあたっては、事前に支持力確認のための載荷試験を敷地内で多段拡底杭とともに実施している。

『うめきたSHIP』の構造

うめきた広場西側にある『うめきたSHIP』は鉄骨造2階建ての建物である。三日月形の1階床の形状と同じ三日月形の屋根面の形状が「互いに反転した位置関係」にあり、これらが壁面で立体的に結ばれ「鼓のような」流動的の形状である。

この建物の床は2mピッチに配置された27の1スパンフレームで支持している。フレームは端部が東側に、中央部が西側に傾斜する形状となり、外周部のすべての柱が傾斜している。柱が傾斜することにより長期荷重時に生じる水平力が全体でバランスするよう建物形状を決定した。このアウトフレームとなる「バランスドフレーム」の柱は100×200mmのフラットバーを採用した。耐震要素として地階から1階まで貫通する鉄骨造コア（190.7φのシームレス鋼管で構成されるトラス架構）と地階から1階に連続するRC造耐震壁を配置している。

（嘉村武浩／日建設計）



■左図／構造全体の概念図。タワーA、B、Cは制震で、オーナーズタワーは免震で、それぞれ構造計画を行っている
■下図／うめきたSHIPの「鼓のような」フレームワーク



■■■■■ 8 防災計画

『グランフロント大阪』の容積の相当割合は商業やナレッジ、オフィスといったテナント賃貸フロアである。複雑なプログラムの建築計画を可能な限りシンプルな空間として実現するために、防災計画においては性能規定による「全館避難安全検証」を行っており、国土交通省大臣の認定を取得している。本来ここでは最終的に出来上がった建物のすべての平面計画を以て大臣が認定を行うもので、先述のテナント内エリアとはいえ改造工事によってプランが変わることとなれば、その都度いちいち大臣認定の取得をし直すことが原則である。

数百に及ぶ商業・ナレッジ系テナント殿や、大小さまざまな規模のオフィステナント殿の入退居や改造ごとに大臣認定再取得を行うことは現実的に不可能なため、日本建築センターや国土交通省との協議を踏まえ、本計画では、あらかじめ想定されるテナント内プランニングの可能性について、柔軟な運用が可能な、全く新しい概念の「防災あらかじめ検討ルール」をつくりあげることとした。そして「ルールそのもの」を大臣認定取得し、ルールの範囲内であれば、コンプライアンス上も全く問題がないものをつくりあげている。実際には初期入居のおよそ95パーセントのテナント殿に、このルールを使ってテナント内のプランニングを行っていただくことができたことから、本ルールが柔軟かつ現実的なものできたと言えると思う。

■■■■■ 9 外構・緑化・水景計画

敷地に接する側の歩道はまち全体の計画とともに進め、敷地内外構と一体的に設計した。開発事業者が一部工事費を負担することでペーヴメントの仕上材を天然石としたり、歩道照明柱に複合機能を持たせてオリジナルデザインのものをつくるなどしている。

敷地内外の歩道には、シンボル軸3列イチョウ並木、賑わい軸2列ケヤキ並木をはじめとし、『うめきた広場』内の「ケヤキテラス」での木陰づくり、「オオシマザクラ・エドヒガン・ソメイヨシノによる親子桜の競演」、また芝田町側には高木+低木+地被類により起伏を持たせるなど、ペーヴの性格に応じて緑の在り方にも変化を持たせた。自然軸『ザ・ガーデン』には水景際にサクラやイロハモミジを主として情景をつくり、日本の四季が楽しめる庭園としている。

屋上庭園には一般来街者が自由に立ち入れるものとして計画。風洞実験により50m/秒の瞬間風速にも耐えられる樹木支柱により万一の事故に備えた。『南館』屋上はポケットパーク的な憩いの小空間がカーブに沿って連続する。一方『北館』では東西で2層分の落差を持たせた屋上回遊動線をつくり、メインとなる西側は「草原のイメージ」で計画。

シンボル軸側のコリドール空間『都市回廊』に沿った水景は北から南に向けて流れる。川床は全体共通も砂利洗出しとし、流れに緩急をつけて歩行者に水景の優しさと「大阪らしさ」を感じていただけるものとした。

■■■■■ 10 サイン計画

駅直結の巨大複合施設で、相当数の来街者が見込まれることから、まちの案内役となる全体サインの検討と計画・設計には設計3事務所に加え、サイン計画の専門家を招聘している。そして開発事業者とともに運営側面からも検討を加えている。

「誘導系サイン」では、圧倒的な来街者導入部となると想定したJR大阪駅との接点や、阪急梅田駅からの導入となる交差点付近から、目的施設がすぐにわかるようにすることを心がけた。特にJR大阪駅側からは地上にいても北館やタワーB・タワーCが全く見えない配置となっており、模型を使ったサインや「次の誘導サインが見える距離に連続させた大型サイン」を設置し、来街者をストレスなく導くものをつくっている。

外構のサインは統一デザインの筐体とし、街区ごとにサイン筐体は異なった意匠のものとしているが盤面の内容やフォントは共通のものとすることによって、来街者がわかりやすいものを目指した。

■■■■■ 11 「ものづくりの息吹」と「匠の技」

建築の現場は、それら一つひとつが結局は人間の手によってつくられるが、本計画では「匠の知恵と技」を採り入れ、それがしっかりと表情に表れることが大切な要素だと考えた。設計者・監理者・施工者だけでなく製作メーカーや現場の職人たちと知恵を出し合い、「ものづくりたち」の総合力がつくりあげた建築



■低層商業・ナレッジテナント、高層オフィステナントともに防災計画で「あらかじめ検討」を構築し、ルールそのものを大臣認定取得している。これによりテナントが入れ替わったりプラン変更が発生してもルール内であれば防災計画におけるコンプライアンス上何ら問題がない



■ブロックごとにデザインが異なってもフォントや記述のシステムを合わせ、見やすく配慮したサイン。デザインの工夫も盛り沢山

にできることが目標だった。特に大勢の人々が訪れる『南館』『北館』は純鉄骨造の建築であり、外内装とも仕上げは乾式である。やめると工場製作で小奇麗な材料で仕上げた「よそよそしいまち」となってしまうが、本計画では主となる仕上げには「つくり手の手垢が残るもの」を用いたいと考えた。

『うめきた広場』ではRC鑿り仕上げに光がこぼれ落ちてくる表情をつくり、『うめきたSHIP』の特徴ある鉄骨フレームとガラス外装の取り合うブラケット部分では、現場での溶接職人の手によってシャープなディテールが生まれた。

『南館』『北館』の外装PC版は研ぎ出し若しくはビシャンなどの「職人の手作業によって施された表情」をもつアーキテクチュラルコンクリートとしている。セメントの配合、顔料の用い方、骨材の選定と見せ方、研ぎ上げの刃の番手、撥水剤による艶の出し方など、設計者が意図した表現をつくりあげたのは製作工場の人たちの努力によるところが大きい。『南館』では大阪駅からの導入部にGRCをベースとして特徴的なフォルムの真っ白な大きな柱『ウィッシュボーン』をつくっているが、艶やかで滑らかな表情は現場の職人たちの技による。

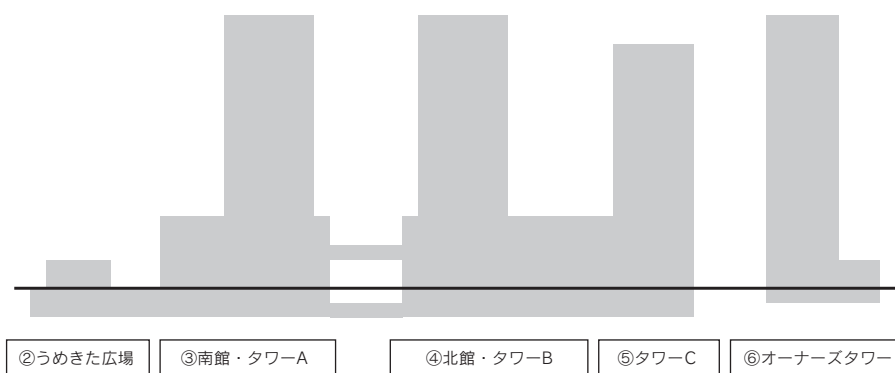
『北館』では外装との共通性を持たせて、『創造のみち』や『ナレッジプラザ』1階・2階の床をカラーコンクリートの研ぎ出しとしている。また壁面にはコンクリート打ち放しや、現場職人の手仕上げによる模様を複色で重ね合わせた特殊な塗装方法によっている。ホテルが入るタワーC低層部の外壁では、ページュの花崗岩（厚み65mm）に、彫りの深い手作業による鑿所を仕上げとしている。

日本で育まれた「ものづくりの技術」が、まちの空気のかなで感じられるものをつくりあげた。



巨大現場は、外装PC版や床の研出しをはじめとし、内装の特殊塗装、サイン、各種演出系の造作にいたるまで、職人の技に支えられた

■設計・監理体制



①全体統括設計チーム

- ☐ 全体統括：日建設計+三菱地所設計+NTTファシリティーズ
- ☐ うめきた広場：広場基本デザイン・デザイン監修／安藤忠雄建築研究所
設計・監理／日建設計（実施設計は大林組と協働）
- ☐ 南館・タワーA：設計・監理／建築：三菱地所設計（実施設計は大林組と協働）、
設備：日建設計（実施設計は大林組と協働）
- ☐ 北館・タワーB：設計・監理／日建設計（実施設計は竹中工務店と協働）
- ☐ タワーC：設計・監理／NTTファシリティーズ（実施設計は竹中工務店と協働）
- ☐ グランフロント大阪オーナーズタワー：設計・監理／
大阪駅北地区先行開発区域実施設計業務共同企業体／三菱地所設計+竹中工務店+
大林組+日建設計※+NTTファシリティーズ※（※開発区域内調整）

■■■■12 設計体制／「基本設計JV」の発足と「全体統括設計チーム」の編成

2008年に日建設計・三菱地所設計・NTTファシリティーズの3社が基本設計を進めていく設計JVとして開発事業者より任命された。街区ごとに設計チームが編成されたが、事業性を裏付けるのに必要な計画ボリュームの策定をはじめとし、まち全体に及ぶ骨格や仕組みづくり、全体を統べるデザインの方向性などを検討・決定していくために「全体統括設計チーム」を3事務所合同で組織した。

実施設計フェーズでは、設計3事務所に竹中工務店・大林組設計部のメンバーも加わり、5社でのJVを編成した。同時に実施設計段階より施工・仮設の検討も行っている。

■■■■13 現場体制／統括監理チームと施工JV総合事務所

『グランフロント大阪』の現場では、一般的業務に加え、高い品質の建物づくりが

「街区ごとの事情にかかわらず」、「全体が均質になされているか」という視点をもつ」ことが必要であった。設計全体統括チーム同様監理チームも3設計事務所による「全体統括監理チーム」を編成した。ここでは各ブロックごとに起きようとしている、または起こっていることを逐一報告しあうことで可能な限り「効率の良い現場運営」と「リスク回避」への対策とした。

監理と施工は原則としてブロック毎の運営であった。単独の建設現場としてそれぞれの事情に見合った最適解を見つけ出しながら工事にあたったが、その上部組織として「総合事務所」という全体調整のための独立した機能で動くことができるチームを編成した。「統括監理チーム」と「施工JV総合事務所」が常に緊密な連携を図り情報を共有し、タッグを組んで健全な現場運営にあたることにより、巨大でかつ複雑、長期間にわたる工事期間を順調に進めてこれたと言ってよいだろう。

現場総括所長に聞く

大林組と竹中工務店の手によって本格的に槌打つ音が響き始めたのは2010年春。巨大さと複雑さゆえ、決して順風満帆な現場とはいえなかったが、携わる「つくり手たちの知恵と努力」で難局を乗り越えてきた。

ここでは足掛け36か月、延べ180万人の作業員を動員して今回の大事業を完遂させた『梅田北ヤード共同企業体』を率いたお二人の総括所長に、現場を振り返っていただくと思う。



羽田野孝男総括
／大林組
総合事務所総括所長
(前半期担当)

故あって急遽現場に赴くことになりましたね。着工した年の6月からですから2か月ほど過ぎてから現場に来ました。命を受ける前から注目されていたプロジェクトだったので、凡その内容や50:50のJVであることなどは知っていました。また「総合事務所」なる組織をつくり、それぞれの街区ごとの現場を束ねたり調整したりする役割を担うことも聞いていました。多少は心配しましたが、行けば何とかできるだろうと思っていました。

複雑巨大な現場ですから「窓口となるチーム」が存在することは重要でした。現場全体の安全管理、コスト管理、そして現場から発信する情報の一元化などですね。それらをトータルな見地から検証して、各街区の現場に伝えたり。事業者との会議なども原則として「総合事務所」が窓口となりました。

竹中工務店ともいい関係が築けたと思っています。お互い古くからのライバルではあり

ますが、現場で私たちがやるべきことや目標は同じですから。とにかくやり始めてからはいろんなことがスムーズに進みました。どの街区をどちらのゼネコンが主力で進めていくについては合同で新しい会社をつくろうとかいろんな議論があったようですが、結果的には大林システムを使う街区と竹中システムを使う街区をきっちと分けて運営したことでいろんな物事がやりやすくなった。その上で全体のパワーバランスを50:50にその時々で調整しながら進めていきました。そして街区ごとに、例えば所長が大林の工区なら次席は竹中からというように、互いの意見やアイデアがお互いに通りやすいようにしました。

私は総合事務所の専従で、工期の前半を所長として勤めました。後半は副所長。全街区の現場がうまく、バランスよく進められるようにするためにどうするかを考えたり、あるいは何か困難なことが起こればどう乗り越えるかを算段したりするようなことが主な業務でした。とにかく大きくて複雑な現場でしたから、何よりも安全には気を遣いました。現場には労働基準監督署や警察の査察があるのですが、毎月パトロールに来てくださってね。こんなことは珍しい、協力的にいろいろと指導していただきました。おかげさまで安全にかかわる賞を戴くこともできました。

全体を通していちばんきつかったのは「追い込みの数か月」でした。考えてみれば本体工事金額の5%に相当するテナント工事が追加発注されていて、けれど竣工まじりさきのタイミングを遅らせるわけにはいかない。最後は24時間体制で、みんな泊まり込みながら工事にあたってくれました。労務の不足

もですが、やはり「破格の大きさの現場」であったことが大変さの一番の理由ではないかなと思っています。ピークの時には全街区で一日6,500人が現場で働いていましたから。

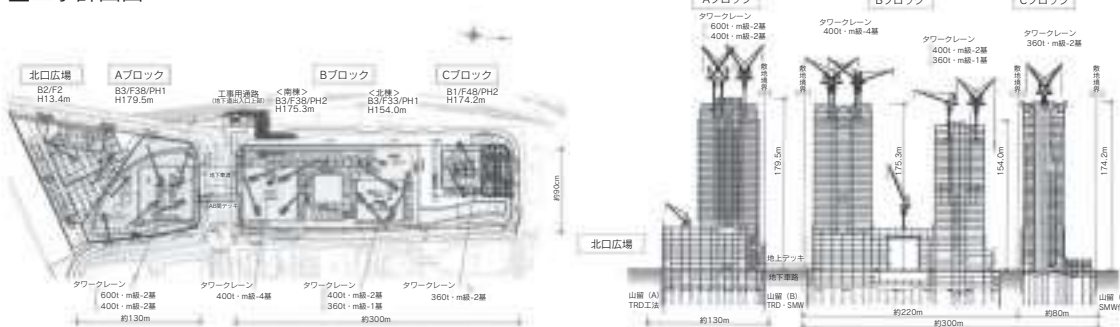
地上の巨大な建築もさることながら、『うめきた広場』や『A-B間地下車路』、賑わい軸上空に架けた『A-B間デッキ』のように特殊なものもつくらなくてはなりません。

『うめきた広場』のような、地上躯体がなく屋根を持たない建築というのは実は大変なのです。通常なら躯体が上がって、追っかけて外装をやり屋根をやり、それから内装をつくるという手順が踏めるのですが、『うめきた広場』には地上がほとんどない。地下から躯体ができてきたら、あとは一気に何もかもをやってしまわなくてはならないのです。その上あの広場はJR大阪駅や、先行して現場が進んでいた『南館』と地下で広い間口で接続しているでしょう？難工事と言っていると思いますよ。

22歳でこの世界に来てから、数年前の一時、母店の生産設計部長をやっていた以外はずっと現場です。私はいつも「クレーム・ゼロの先取り管理」を目指しています。そのために、まずは「図面管理」をきっちり行なうことが大切だと考えています。納期を守り、品質を守るためには、何よりも「図面をちゃんと決めていくこと」が大事なのです。

若手にはいつも「図面を見よ」と言っています。設計図であれ躯体図であれ施工図であれ。最近では現場でもタブレットに図面データを入れて持ち歩かせ、どこでもそれを開けられるように環境を整えていますが、なかなかしっかりと図面を見てくださいねえ。昔

工事計画図



大林組、竹中工務店が合同で仮設計画検討チームを編成し、実施設計期間と並行して工事計画を進めた。高層部仮設にはJCC-600、400級をメイン揚重機とし、リフトアップ足場を併用。低層部には大型クローラーを走らせた。工期短縮のための逆打ち工法の採用、近隣への影響を抑えるための工事車両用棧橋設置、地下車路および上空デッキの道路占有など、採用技術は多岐に及ぶ

私たちのころにはコンクリート図を現場のスタッフでT定規で手描きしていたので、いつ誰に問われても全部答えられましたからねえ。そして枕元には縮版の図面を置いて寝たものです。それが基本。全部頭に叩き込んでいた、でなければ現場に出れないと思っていました。

一生のうちで、こんな仕事に携われることなんてもうないでしょう。やり切りました。

できてから『グランフロント』を歩くとき、好きな空間は「水景」と「街路樹」。暖かい日には子どもさんたちが水辺で楽しく遊んでいますが、そんな風景を見ているととても幸せな気持ちになります。たぶん大勢来られているお年を召したご夫妻や友達連れの皆さんも、きっと同じようにこのまちを楽しんでくれているのだろなあ、と。気に入ってますよ、『グランフロント』。(談)



中尾和昭総括
／竹中工務店

総合事務所総括所長
(後半期担当)

最初にこのプロジェクトの話が来たのは2009年6月で、実施設計と並行して仮設計画を行いました。アイデアレベルのものも含めて見直しを進めていたのですが、私の役目は技術的な裏付けをとることでした。とにかく物量が多い現場になりそうだということで普通のやり方をしているのは到底間に合わない。大量の資材をタワークレーンでいちいち揚げているのはダメだということで、タワー仮設には3層ハチマキ状のリフトアップ足場を使おうとか、周辺に対する安全対策には垂直養生ネットを全周にわたって張るぞとか、そういった検討をやっていました。統括所長として現場を見ろ、と言われたのはしばらくたってからのことでしたね。

日本一の規模の現場を任されることになりましたが、大きさに関しては「みんなでやれば必ずや乗り切れるだろう」と思っていました。それよりも竹中工務店・大林組が50：50のJVを組むことになっていたのですが、平等

性と透明性を確保し、どんなやり方が最も確実で合理的なのかを組み立てることのほうが難題でした。50：50は前代未聞でしたし、無駄のない方法を考えなくてはなりません。

結果的に2社それぞれが持っているシステムや運営管理のやり方を、担当ブロックを決めてそこで存分に発揮する、ということに落ち着きました。大林組とミーティングを持つてからは不安はなくなりました。お互いに価値観をすぐに共有することができたし、情報のやり取りもスムーズでしたから。

これだけの現場ですから、対外的にどう情報を発信していくか、つまり「北ヤードJVとしての統一見解を持つことが必要」だということになり、そこで「総合事務所」というチームをつくることになりました。総合事務所は、各ブロック担当現場事務所の上位にいて全体を束ね、相互調整を図ったり統一見解を出したりすることが主な仕事でした。私はBブロック総括所長でしたが、工期後半の1年半は総合事務所長を兼務しました。

東北の地震の影響はさほどでもなかったのですが、着工した夏に起きた生コン組合のストライキは大打撃でしたね。構真柱は現場にずらっと並べられているのにコンクリートが来ないから打ちようがない。すでに掘っていた何十本かの穴も埋めました。楽観していたけれどずるずると解決せぬまま、結局丸2か月間現場は進捗がゼロでした。

ストが終わり、ようやく生コンが来始めてから何とか遅れを取り戻すべく工程を見直しましたが、計画は立てたもののここからの挽回は本当に大変でしたね。今回の現場は「逆打ち」を採用していましたが、2010年の12月末までに、とにかく1階のスラブを打つんだ、それができればあとは何とかやりくりできると考えていました。1階スラブができたことと、地下2階への本設および仮設の二つのスロープを設けたことで、工事車両の錯綜が解消できて一気に効率が上がりました。

設計上のこだわりの部分には気を遣いましたよ。タワーB自然換気のためのコーナーボイドは堺にある竹中機材センターで実物の

キャンティレバー梁組を行い、ガラスの取り付けや施工精度の出し方など、何度もテストしました。低層外装の研出しPCも意匠性・構造強度・止水・耐震性能など、確認することは多かったです。特に縦リブPCと、都市回廊の丸柱に使ったPCは表情の出し方がとても難しかったけれど、デザインの大きなポイントでしたから。

設計との打ち合わせは所長や課長クラスが担当しましたが、持ち帰ってきて毎日毎晩、課題を相談しているうちにみんなが集まってきてワイワイやり始めるのです。全員でアイデアを出し合い、解決に向けて頑張ってくれました。

初めて現場所長に任ぜられたのは40歳の時です。それ以来「安全第一」、「高い品質」、「工程を守る」、この3つを自分の柱にしてきました。3つ揃わなければよい建築はつくれないのです。今回は「徹底したプロセス管理による高い品質の造り込み」や「関係者全員のスキルアップによるコンプライアンス問題の根絶」などをプロジェクト目標として全員に周知し、歴史的な現場に携われる感動と誇りをみんなに感じてもらい、最高の建物を完成させようと意気込みをもってやりました。

私は「一人の棟梁として」、自分が安心できないようなものを、誇りをもって相手にお渡しなどできない性格です。だから何よりも、自分が納得するまで徹底的にやってきました。今回はさすがに規模が大きすぎて隅々まで眼が届かなかったところもいくつかあり、それが心残りです。けれど私のもとに来てくれた何人かの所長やさらにその部下たちが一生懸命やってくれましたからここまで来れた。彼らを信じて良かった。みんな「中尾に叱られた」という思い出しかないと言います。それで良いのです。

このプロジェクトに携われたことは私の誇りです。この仕事を通じて若手たちにバトンは渡しました。あとはそれを受け継いで納得いくまで徹底的にやりくり、さらに次の世代の者たちにもっと重くなったバトンを繋げていってほしいと思っています。(談)



インタビュー I

～大阪市が目指した北梅田地区
のまちづくり20年～

元大阪市計画調整局長 (2000～2005)

岩本康男氏

前大阪市計画調整局長 (2007～2012)

北村英和氏

聴き手

日建設計：岡田耕治

『グランフロント大阪』の開発が本格的に始動してから10年余りが経つ。インタビュー I では、大阪市計画局のトップとして開発初期に「道筋をつけられた岩本さん」、後半の「計画具体案をより深め、熟成させていかれた北村さん」のお二人に、それぞれどのような想いやお考えをもって開発に取り組まれてきたかをお聴きした。「大阪のまちづくり50年の計」について考えるきっかけを頂戴できればと思う。

「OBP～西梅田があったからこそ

『うめきた』ができた」

岡田 お二人は同じ大学の土木工学科を卒業後大阪市に入られ、以来ずっと計画畑を歩いてこられました。

岩本 1970年に大阪市に入りました。総合計画局です。万博の年で、大阪に一番活気あるときでしたね。総合計画局は昭和38年にできましたから今年でちょうど満50年です。

北村 私は1976年に入りました。大学時代の研究分野は水文学でしたが、それとは全く違った都市計画畑で、ずっと過ごしました。

岩本 僕は交通計画から入りました。インフラ系の都市計画ですね。大阪市が面的なまちづくりに目覚めたのはOBP、西梅田開発からでしょうか。

北村 OBPは元々区画整理をやってインフラの形が出来ていて、それから面開発ですが、西梅田は北ヤードと同じく初期段階からエリア全体に再開発地区計画をかけています。

岩本 民間と一緒に開発を進めることができたのはOBP、そして西梅田からという印象があります。

北村 ダイナミックさで言えば西梅田は相当な開発でした。あの場所は当時『南コンテナヤード（貨物ヤードはJR旅客線を挟んで北だけでなく南側にも存在していた）』と呼んでいて、西梅田開発のためにまず阪神電車の地下化をしました。当時は西梅田の途中まで地上に鉄道敷がありましたのでね。それを地下化し、同時に阪神高速道路のランプを北側に移設しました。

岩本 それまでの開発では民の役割と役所の役割とは完全に分かれていました。区画整理からインフラまでを役所がやり、出来た土地

に民間が建物を建てるというやり方です。時系列的にもセクショナルにも民と官が分かれていた。官民一緒になってまちをつくらうと動き出したのはたしかに西梅田からですね。

岩本 それぞれ開発した時期が違うわけですが、OBPはオフィスを中心に「業務特化」でまちをつくりました。働く環境に相応しいところでしたから。西梅田あたりになると業務系と商業系を少しミックスしようかということになり、北ヤードになると完全に混在型がいい、複合施設でやろうということになりました。

岩本 OBPは区画整理をおこないましたが、敷地が別々なのでそれぞれがやりたいことがある中で「統一性をもたせるため調整」に奮闘されたのが日建設計です。いくつかある事業者たちをひとつにするんだと。今度の北ヤードは事業者12社が一緒になって取り組んでこられたわけですが、当時より遥かに進化しているなと感じました。なによりも「敷地を割らずに」やれたことはかなり大きなアドバンテージだったと思います。

北村 都市計画的な流れを整理しますと、都市計画法という法律が世の中の流れにあわせて変化する中で、それに応じた都市計画的な手法も編み出されてきました。OBPの開発がスタートしたときは、道路が出来て下水道が出来て、開発そのものは初期の総合設計制度を用いて行われています。今で言う地区計画制度がない時代でした。次の西梅田では、ベースは区画整理ですが、1990年に再開発地区計画を決定しています。公共への貢献の程度に応じて建物の容積率をアップさせる都市計画的な手法が出来ました。総合設計制度で





公開空地を確保した見合い分を割り増ししようというものに、公開空地以外にもどのような貢献要素があるのかを加えていったわけです。西梅田では東西に地下道が通っていますが、こうした要素をカウントすることも出来るようになりました。個々の敷地内に公開空地をとる「完結型」から、エリア全体で貢献要素を確保しつつ、その規模と内容に見合った容積率をアップする「エリア型」へと変化しました。それをさらに進化させたのが「うめきた」でしょう。ここでは、たとえばA街区は1600%となっていますが、これは、エリア全体での貢献要素を勘案して平均的な容積率がいくらになるのかを算出し、ABCそれぞれの街区に対して一種の「傾斜配分」を行っています。このように、時代の要請に応じて、順々にメニューが揃っていった街が出来ていったということなのです。

岩本 OBP、西梅田、うめきた、とだんだんと進化しましたが、同時に官と民の協力度がとても密接になりましたね。

北村 「時代ができたな」という実感がありました。

岩本 これまで、官と民の役割を線引きしていた時代から、一緒になってやろうという時代になったと思います。北ヤードは完全にプランのときから産官学が一緒になってやりましたね。

北村 先ほどの西梅田の例などでは、大阪市の提案を国が認めてくれた事柄も多くあります。デベロッパーと大阪市がキャッチボールしながら、規制緩和をはじめいろいろな選択肢を増やして欲しいという民間側の要望を踏まえて、大阪市として何か出来ないかなという考えのもと、法律の解釈をできる限り「理

想的なまちづくり」のために行ったり、それが困難な部分では国に制度改正をやってもらいました。国には大阪のまちづくりにずいぶんと理解と支援を戴きましたよ。

「再開発地区計画」から「都市再生特区」へ、大阪が切り拓いてきたまちづくりの手法

岩本 再開発地区計画の制度が出来るまでは、容積率のベースを変えないといけなかったから大変だったのです。特別にここだけを、という変え方ができなかった。ですから再開発地区計画というのは画期的なことなのです。あれがそののちに「都市再生特区」につながるスタートだったのです。

北村 再開発地区計画もそうですし、都市再生緊急整備地域や都市計画法にもとづく都市再生特区といった、都市開発に関する最近の制度についても、日本全国を見渡して、大阪市内での開発事業において最も活用されています。

岡田 遡れば総合設計制度も、大阪시가リードされています。

岩本 それで出来た公開空地は、大阪市内のすべてを合算したら大阪城公園より広い。これらは民の力でできているんですから素晴らしいことだと思います。大阪の街は「民の力があってこそ」ここまでのものにできていると思っています。

岡田 市役所に協議に参ってもみなさん気さくに親密に、腹を割った相談に乗ってくださる土壤が今でも続いています。

岩本 都市再生が叫ばれたときから、役所だけでは街は作れないから民と協力して街を良くしていかなければならないことを痛感していました。OBPも西梅田も我々役所の人間は、民間の事業者や設計事務所の人たちに随

分勉強させていただいたと思います。その集大成がこのうめきたかもしれませんね。

「3つの哲学」がうめきた開発の柱だった

岡田 1987年の国鉄民営化以降が北ヤード開発の本格スタートだと思うのですが、お二人のまわりではいつごろから議論が始まったのでしょうか。

岩本 86年に国鉄の民営化に向かって売却リストが出来ました。最初のボタンの掛け違いは、84年にその吹田操車場を廃止決定したことです。吹田地元にとっては開発できると思うでしょう。しかしそののちに梅田貨物機能を吹田操車場跡地へ持っていくことが決められ、地元はすんなりと受け入れることが出来ない。それが、『うめきた』計画が遅れた原因です。実は89年度から90年度にかけて、建設省、運輸省、国土庁がここを開発しようと調査しました。日本国有鉄道清算事業団の目玉は汐留と梅田だったんですね。本格的に動き始めたのは、2000年から2001年に、全体ではなく「7haを先行開発する」と決めたことです。やれるところからやるという意味決定があればこそ出来た開発だったのです。2003年に『大阪駅北地区国際コンセプトコンペ』の実施。このコンペは国内外へのアピールの意味も大きかった。

北村 先行開発区域7haは接道していますから、従来からの総合設計制度だけで開発しようと思えば出来たのです。つまりこういう面開発でなくても個別に切り売りして、開発出来ないことはなかった。しかし調査をやり、そういった流れを当時の国鉄清算事業団も十分に理解されていたので「個別の開発ではなく」、「民間と行政の力を上手く利用して



岩本康男氏／1970年京都大学大学院工学研究科修士課程（土木工学専攻）修了後、大阪市役所。うめきた開発初期にあたる2000～2005年、計画調整局長。



北村英和氏／1976年京都大学大学院工学研究科修士課程（土木工学専攻）修了後、大阪市役所。うめきた先行開発区域熟成期にあたる2007～2012年、計画調整局長。

きちんとした開発に結び付けていく」という考えをお持ちいただけたのです。

岩本 切り売りをせずに統一した街にしようという意向は、経済界からの要望がとても強かったです。それはたぶん汐留の開発への反省がありました。それぞれの敷地ごとにそれぞれの考え方で建物が建っている。大阪は統一した街をつくらうという意向が強かったですね。汐留を何度も見に行き、参考にさせていただいたことは「土地利用を統一したものにすべきだ」ということと「街は駅と直結しなければならない」こと。

北村 それから街の背骨となるしっかりとした「道」を持つ骨格とすることもです。

岩本 汐留に遅れをとった10年間は悶々としていたわけですが、その間を産官学で検討する時間に充てることができた。それが先ほどの3点に集約できた。

岡田 「統一した街づくり」、「駅と直結する」、「インフラとしての背骨をつくる」、ですね。

岩本 背骨となる道は『シンボル軸』と名付けましたが、そこには駅前広場をつくることも含んでいました。

「汐留に後れをとったが、結果的にはそれがよかったのかもしれない」

岩本 汐留ができていく間こちらは焦ってはいましたが、しかしその間にブラッシュアップできた。それは、僕たちだけでなく事業者のみなさんも同じだったでしょう。だから「やれるところからやろう」という大きな決断が一つの切所になったでしょうね。

北村 やるのは早くやりたかったけど、逆に言えばここまで待ったのだからこそ、この開発が出来たと僕は捉えています。あの時始めていたらなんの変哲も無いオフィスビルばかりになっていたかもしれません。国際コンペをやり、それをベースにしながら新しい創造的価値を見出していく、という一つの目標が見えてきて、このまちづくりにつながったと思います。10年前だったらナレッジキャピタルはできていなかったかもしれません。

岩本 コンペ応募作品の中に、「関西から先端的な情報を発信する場をつくるべきだ」という提案がたくさん出てきました。正直、僕らはショックでしたね。佳作入選のなかに「知識創造拠点をつくる」という提案がありますが、そのアイデアが今の『ナレッジキャピタル』のベースになっているのです。

岡田 「大阪らしさ」、「発明とものづくり」をここから発信しようというものです。

岩本 大阪発を発信できる街にしないといけないと思いましたね。ソフトの面のアイデアはとても刺激になりました。

北村 行政としては、ソフトの面のアイデアは有り難いですね。

岡田 我々設計者も「関西最後の一等地」であり、時間をかけた分だけ、変なものは建てられないというプレッシャーがありました。

岩本 経済界の意気込みが違っていたと思います。2004年3月に大阪駅北地区まちづくり推進協議会が設立され、秋山関経連会長（当時）が座長に就任された。同年に大阪駅北地区まちづくり推進機構も立ち上げまして、ともにまちづくりの具体化に向けた検討が行われました。このあとUR都市機構に敷地を先行取得してもらい、区画整理もUR機構にやってもらった。そこから転がりだしました。

北村 まちづくり基本方針の5本柱である、①世界に誇るゲートウェイづくり ②賑わいとふれあいのまちづくり ③知的創造活動の拠点（ナレッジキャピタル）づくり ④公民連携のまちづくり ⑤水と緑あふれる環境づくり——は言わば『国際コンセプトコンペ』で出てきたみなさんの意見を集約したものです。

「水と緑と賑わいの系」をつくりあげる

岡田 「水」というキーワードがありますが、

簡単に実現できるものではありません。『グランフロント大阪』での実現には大阪市が強い想いを持たれていたことが大きな要因だろうと思っているのですが、これはいつの段階から強く意識されたんでしょうか。

北村 『国際コンセプトコンペ』案の中に、淀川から水を引っ張ってくるとう案がいくつか出てきました。もちろんそういうものもベースにありましたが、もともとこの場所は水運の中心だったのです。低湿地帯で川の流れがあって、という地理学的なもの、土地が持つ故事来歴的なものを記憶に留めておく必要があるという考えは持っていました。また環境に対するアプローチでいくと、ヒートアイランドの面から水は大きな必要要素でした。そしてヒートアイランドだけではなく緑とセットになった“やすらぎ”ももたらしてくれます。淀川沿いには使われなくなった工業用水が走っていますので、それをうまく利用できないかなという目論見もありました。最終的に水景で使用している水はなんですか？

岡田 大阪市の上水です。万一飲用されても問題がないものとしなくてはなりません。たし、菌の繁殖も防がなくてはなりませんので。一定区間ごとに循環ろ過滅菌して安全性を高めています。

「大阪駅のリニューアルと歩みを一にできたことはとても大きな結果をもたらした」

岡田 JR大阪駅の建替え計画にも、大阪市としてまちづくりの視点から関与されたのでしょうか。

岩本 『グランフロント大阪』と駅の建替えがほぼ一緒に出来たのは大きいですね。JRにとっても人の流れからいうと大きかったのではないのでしょうか。まちづくりの観点を持って随分協力してくれました。

北村 南側に駅前広場がありますが、道路の一部として都市計画決定をされていて、その関係があって駅前広場をどう整備するのかななどを調整させていただきましたね。

岩本 JR西日本は『ノースゲートビル』の北側から見える景観を重要視しましたね。

岡田 調べた限りでは、大阪駅はこれまで常に南正面だったが、新しくしたことで南北両正面となりました。

岩本 『グランフロント大阪』への来訪者はJRと直結したことでとても便利になりましたよね。圧倒的な動員力があります。

北村 駅に「裏」がなくなったことでますます街が栄えていく。上手く一体化していくことが大切ですが、それが実現されています。実はJRの自由通路はビルの容積率の緩和とセットで都市計画決定を受けています。自由通路で北と南を行き来できるようにJRが確保しておられます。JRの開発は街をつくる開発ですものね。

岩本 複数の大型開発がうまく連携をとられた好例です。数年前から毎年冬に『スノーモンイイベント』が梅田エリアの事業者たちが連携して開催されています。これからは、こういう取り組みを含めて、エリアマネージメントをみんなでやろうという時代が来ると思いますよ。

*

岡田 おふたりがこのまちづくりで一番やりたかったこと、できてよかったところ、やれなかったこと、だからこそ次につなげていきたいこと、などをお聴きしたいと思います。

岩本 車を入れない駅前広場をつくりたいとずっと思っていました。日本の駅前広場のほとんどには車が入っていますから。そして、三角形の駅前広場にしたいなというのが私の願いでした。次のⅡ期も広がりのある広場をつくっていただきたい、街の「広がり」が感じられる広場にして欲しいな、と思っています。あまり言うとな現役の人たちにプレッシャーになりますかね。

北村 Ⅱ期の駅前広場にはJR地下新駅ができる予定ですが、できればそこには建物を建てずに平面にさせていただいて、タクシーが乗り入れるくらいにして欲しいですね。

岩本 街への来訪者が多いのは結構なことですし、狙いでもあったわけですが、先行開発区域ではどうしても下水道の取り回しの関係から南館と北館を地下1階でつなぐネットワークがつくれなかった。歩行者の快適性を考えて、地下レベル・グランドレベル・デッキレベルのトリプルレベルで行き来ができるように、Ⅱ期のときには改善に向けて頑張っ

て欲しいなと思います。

北村 地下レベルでの接続は叶いませんでし

たが、南館から北館へ行く40メートル幅の『賑わい軸』上部を通した立体横断施設を民間でつくり得たのは、現代の大阪では初めてでしょう。歩行者ネットワーク形成に非常に役に立っていると思います。欲を言うと、もう少し広ければなあと思っています。

岩本 あの上空デッキはデザインが良い。柱が無くスリムで、下から見上げたときにとっても綺麗だ。

北村 景観にマッチしています。あと『グランフロント大阪』の東側の芝田町街区をこれからどうしていくのか。今回の開発により、芝田町側の道路は開発前と比べるととても美しく、広い歩道ができて良くなりました。開発に際してはこういう周辺との調和も大切です。今後JRの弥生会館を含めた開発を上手くやっていただくことで、さらに将来芝田町全体に良い波及効果が出てきます。先行開発区域が東側とどう繋がっていくかが大事なかなと思います。

*

岡田 最後に次の世代に向けてメッセージをお願いいたします。

北村 まちづくりを考えるときには行政が独りよがりになってはいけないと、若い頃に先輩方から教え込まれました。その気持ちを持

ち続けることで、まちづくりに対してモノの見方が変わるかなと思います。みんなと一緒に頑張ってまちづくりをやるという気持ちを忘れず、Ⅱ期開発に取り組んでほしいと思っています。

岩本 大阪は人・大学・企業が市外へ出て行った。今、人は戻ってきたし、大学はサテライトがあるのですが、企業の中核が戻ってきていない。都心では、企画力を生かせる仕事を増やさなければいけないと思いますね。そのためには大学と企業のコラボレーションなどをこのような場所でこそ育ててほしいと思います。シリコンバレーはサンフランシスコのダウンタウンの魅力ある開発とセットだからシリコンバレーやスタンフォード大学などが生きているのでしょうし、シンガポールの新しいバイオポリスを見ているだけでもダウンタウンの魅力が相乗効果を与えているんですね。そういう観点でやれば関西全域のプラスになると思います。まちづくりはそれを見据えた土地利用計画を立てなくてはならないと思います。大学機能はサテライトだけでなく、本格的に帰ってきてほしいですね。そして都心に若い人が活動してくれるような場が溢れている街になってくれば、と願っています。

(インタビューⅠ：完)



西梅田地区の高層ビルディングより望む『うめきた』の全景



インタビュー II

～ナレッジキャピタルの創造～

元大阪大学総長（2003～2007）
現ナレッジキャピタル代表理事

宮原秀夫氏

聴き手
日建設計：岡田耕治

間を持つものとなっているのは革新的なコンセプトを持つ『ナレッジキャピタル』があるからこそだが、提唱以来その中核施設を牽引して来られた元大阪大学総長の宮原先生に、『ナレッジキャピタル』で実現しようとしたことをお聴きした。

「何ができるかなんてわからなかった」

宮原 一言で言うなら、「ここでみんなでおもしろいことやらないか」だったね。何ができるかなんてわからない。新しいものなんて常にそういうものだ。それに面白いってことはお金に繋がらないかもしれない。出資者には「ここにこれだけ投資したからって、すぐに儲かることはありません。だけど『ナレッジキャピタル』が面白いものになれば人が来る。そうすると、商業施設も賑わうでしょう」と言い続けていました。

元々の発想は10年位前にまちづくり推進協議会のメンバーたちと個人的に集まって「関西で強い『ロボット技術』をメインの題材にしよう」と話していました。それとメディアアート。オーストリアのリンツにあるアルス・エレクトロニカでメディアアートによる「まち興し」と世界的なイベントをやっている。そこには若手クリエイターが集まってくる。テクノロジーとアートが融合したようなものをやっている。リンツはもともと鉄鋼の街で街が衰退してきて、「まち興し」のために何かやらなければいけないということで、行政が中心になって始めた。それが成功して、オーストラリアの中でも失業率が一番少ない町になったと聞いている。その情報を得、これをモデルとしてはどうか考えたんです。

このとき、テクノロジーとサイエンスとアートが融合したもので考えましょうということになった。ナレッジキャピタルのコンセプトは「サイエンスとアートの融合」。単にデザインだけでもダメ。そしてプロダクトは見た目がとても大事。デザインってとても大事なんです。

『グランフロント大阪』の『ナレッジキャピタル』で最もコンセプトualな場所は『ナレッジサロン』なんです。どんどん会員が増えて活発になってきている。いろんな

人が来て自然にコラボレーションがはじまり、新しいことを考えていく。人々が同じ場所に集まってコミュニケーションをとらなければコラボレーションなんてできないと思っています。「コラボが自然発生するような場を提供する」というのが、ナレッジサロンのコンセプトです。われわれが期待していたものが現実的に始まっていますよ。

「人が集まってくる『場』をつくる、ビジネスが先ではなく、だれかと友達になることが大切なんだ」

宮原 北館のThe Lab.にある電気スポーツカーが40台ほど注文が来たらしい。その隣は音楽・楽器研究が入っていますが、音が出ない電気自動車から、スポーツカーらしい音をどうやって出したらいいか。どれくらいの周波数で出したらいいかを音の研究者に相談し、依頼している。まさにThe Lab.で自然にコラボレーションが発生してるんです。こういうことが期待していた効果です。

ほかにも介護ロボットの展示があるけれど、デザインをデザイナーの喜多俊之さんに頼んだそうです。優しい感じのデザインって大事とおもう。それは技術者だけではなかなか出来ない。そこにアートデザイナーを融合できたら綺麗なかたちのものが出来上がるでしょ。そしてここにサイエンスとアートにもう一つ、エンターテインメント性を加える。結構子どもさんも来てくれて楽しんでますよ。

岡田 「先ずは場をつくる」というのが狙いだったのですね？

宮原 そう。研究者は「場」があれば、あとは好きにやるんですよ。サロンは年齢層が若い。ものすごく活発に使われている。



岡田 正直言って、ナレッジキャピタルなんて流行るんだろうか？と半信半疑でした。

宮原 みんなそう思ってましたよ。まず「人と人とが友達になる、それが大きな輪になっていく」中で、はじめてビジネスの話が出てくるようなことにしていけたら素晴らしいだろうな、と。仮にそのビジネスがダメになっても人と人のつながりはその先もちゃんと続いていくでしょう。それが大事なんじゃないかと考えてた。

開発するんだったら単にオフィスビルを建てるのではなく、何か新しいことやりたかった。關淳一市長ともそんな話をしていた。2003年ごろだと思う。その後2006年の事業コンペのときには、このBブロックはそういうナレッジをテーマにした新しいコンセプトを提案して下さいということでした。

「無駄な空間がどうしても必要だった」

岡田 先生は「空間の中で融合しあう」ということを目指されていたのですね。理想とするコラボレーションの「場」がくれたとお感じですか？

宮原 とてもバランスのよい空間を設計していただいた。真ん中が吹き抜けになっている。スペースをふんだんに使っている。すばらしいのは2階、3階にいて、他の階が何をやっているかすぐにわかる。デパートのようになっていたら他の階が何をやっているかわからない。違うフロアからも容易に他のフロアの状況を把握できるというのは、すばらしい。全体的にきわめて評価をしていますよ。

今日はどこそこに人がたくさん並んでいるなというのがわかるわけでしょう。それがフロアで仕切られたらそこに行かなければわからない。直感的に情報収集ができ、自分が次に何を見たいかというのがわかる。そういう意味では上手く設計しているということを感じた。

ふつうあんな無駄な空間、フロアにしてしまえばお金がとれるわけです。『ナレッジサロン』のところに光庭があるでしょう。この前雨が降っていた日に屋内にしながら雨が降っているのがわかるわけ。普通だったら無駄な空間というわけだが、ちがうんだな。屋内にしながら外が大嵐になっているのを体感でき

るってすごいんだよ。世の中、無駄、余裕をどうやってとりこむかってことなんですよ。

岡田 このITの時代に「あえて」いろんな考え、立場の人が集まってくる場を作ったかったということでしょうか。

宮原 真のコミュニケーションはフェイス-toフェイスだって、いつも言ってるんです。メールでいろんなことを済ませるから問題が起こってくる。本当の情報通信システムは、人と人との、物理的な交流が増えるように作られるべきだと思っています。TV会議が出来たからって物理的に東京と大阪の人の往来が減ったかというそんなことはない。「じゃ、次は会って話しましょうか」って結局そうなる。そういう「場」を作ったかった。しかしこれからだよ。ずっと続けていかなければならない。

好調なスタートを切った『ナレッジキャピタル』

宮原 ナレッジサロンには今900人の会員が登録している。最初は集まるかなとおもったけどね。仕事場に使っている人が随分居るよ。正直言って、あんな広いところがガラんとしたらと心配した。

岡田 先生の中でナレッジキャピタルのイメージがなんとなく固まってきたのはいつのころでしょうか。

宮原 建物の外装が出来てきて、設計事務所のみなさんとこんな広さとか吹き抜けがどうだとか、そういう具体的な物理的な条件が整ってきて、サロンってこういう雰囲気のものにしたいとなってきた。サロンではこういうことをしたいとかThe Lab.ではこういうことをしたいというのは最初からあったけど、建築家ではないから空間の雰囲気まではわからないよね。

岡田 設計していて、都市の中にナレッジキャピタルが立体的に連関しながら存在していく、というイメージが朦朧に見えてきた。先生は「部分」のイメージをお持ちで、我々は空間イメージを持っていて、それが基本設計の後半ぐらいのどこかで噛み合ってきました。

宮原 ナレッジキャピタルだから『創造のみち』や『ナレッジプラザ』みたいな大きな立体空間ができた。普通のまちづくりだったら



宮原秀夫氏／大阪大学基大学院終了後、礎工学部教授などを歴任し。2003～2007年大阪大学総長。現在名誉教授、ナレッジキャピタル代表理事。

あの吹き抜け空間をフロアスペースにして儲けよう、吹き抜けや無駄なスペース作るな、となりますよね。

惜しいなと思うのは西側の並木。Ⅱ期が出来ていないから「生きていない」。だからこそⅡ期が問題だね。Ⅱ期のやりようによってあそこがすごく賑わうと思うんです。ここがどう生き生きするかね。いろいろ案が出ているけど、森をつくっておわり、ではだめだ。

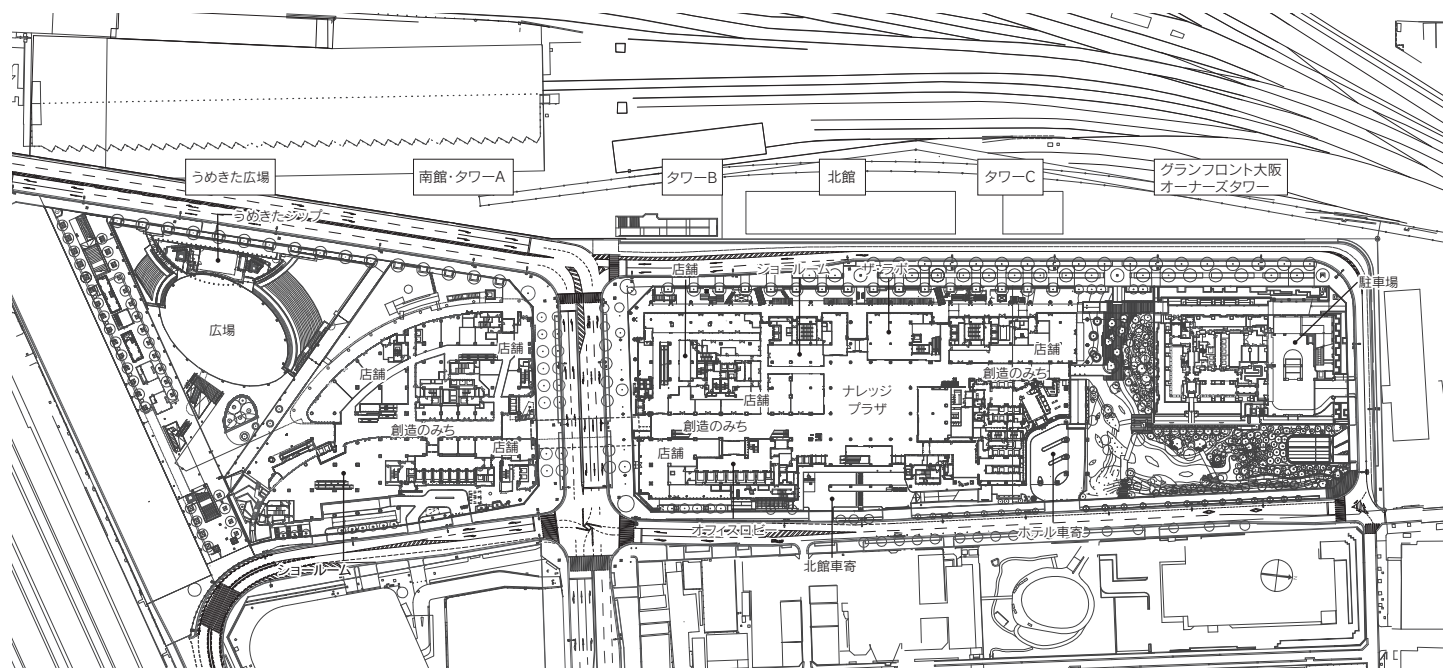
岡田 竣工して2か月が経ちましたが、どんなお気持ちで見守っておられますか？

宮原 見学者が増えてますよね。国内からも国外からもね。遠い国からわざわざ見に来られる。皆さん楽しみながら、とても感激して見ておられますよ。

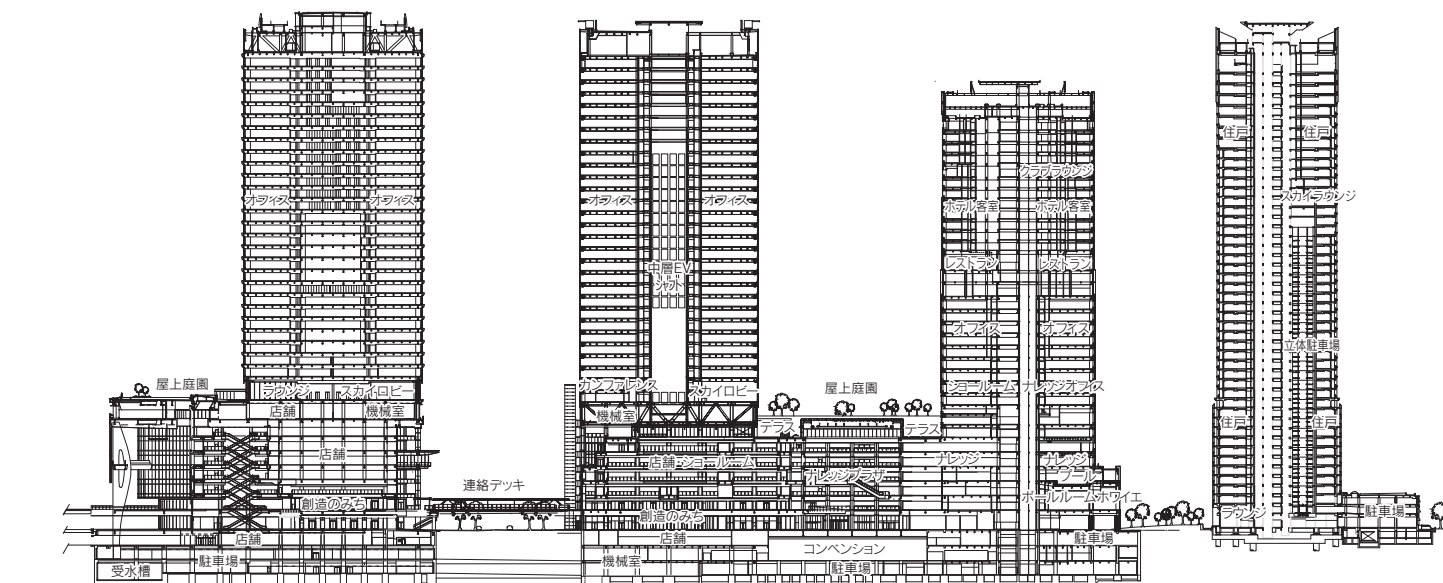
ラボは全部ガラス張りにしてくれと言ったんです。中で研究者がなにをやっているか外から見てわかるようにしようと。単にパソコンに向かって何かやってるだけでも外から見えるようにしようと言ったんですよ。ある博物館でね、研究者たちは部屋の中で作業していたんだけど廊下のところをガラス張りにして廊下に向かって机を並べた。そうすると、小学生なんか廊下からじっと見ているわけです。それが研究者のインセンティブをあげている。それで、ここでも「これをやろう」って言ってね。嫌なときはブラインドをおろせばいいのですね。

『ナレッジサロン』のミーティングルームは全部ガラス張りにしています。外から見ておじさん連中が「何かやってる」ってのがわかる。こういうことを含めた「場づくり」を、僕はずっとやりたかったんだ。

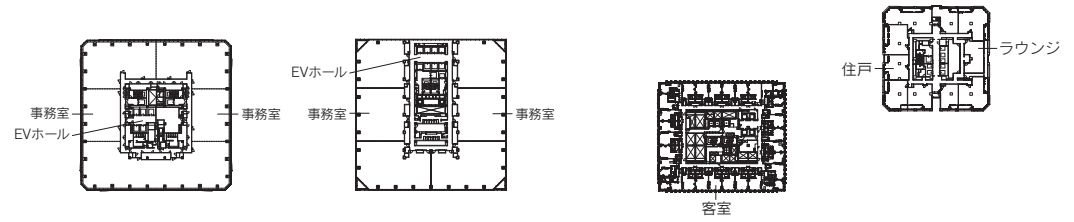
(インタビューⅡ：完)



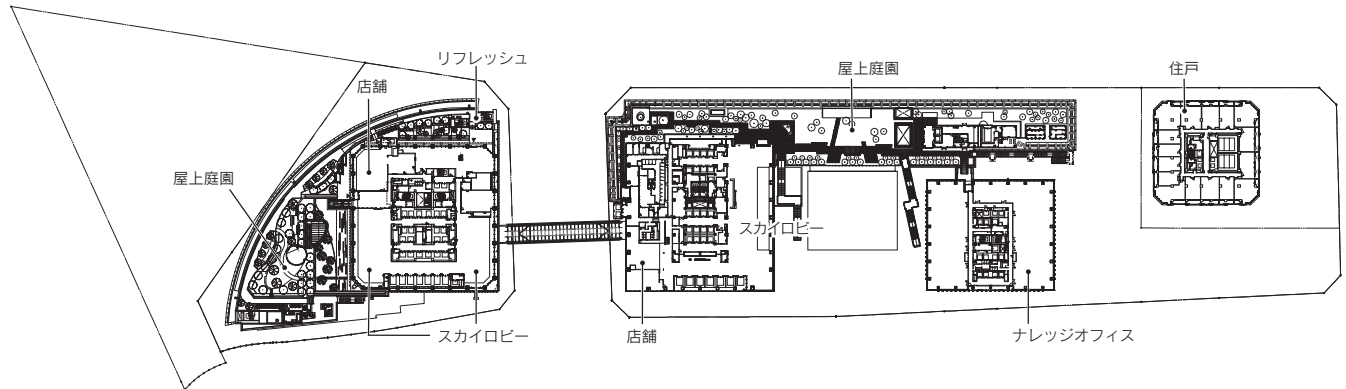
配置図・1階平面図 1/3,000



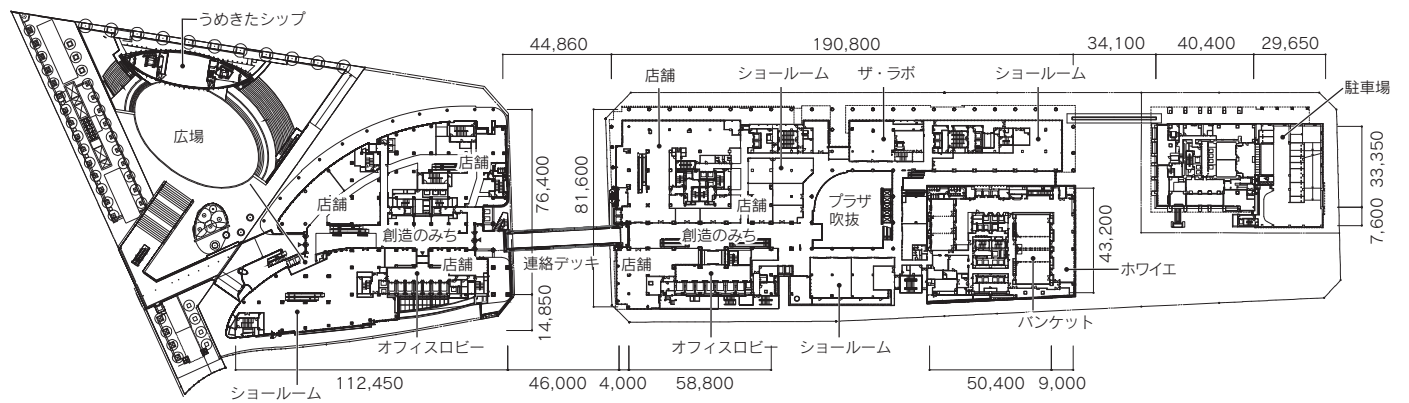
断面図 1/2,500



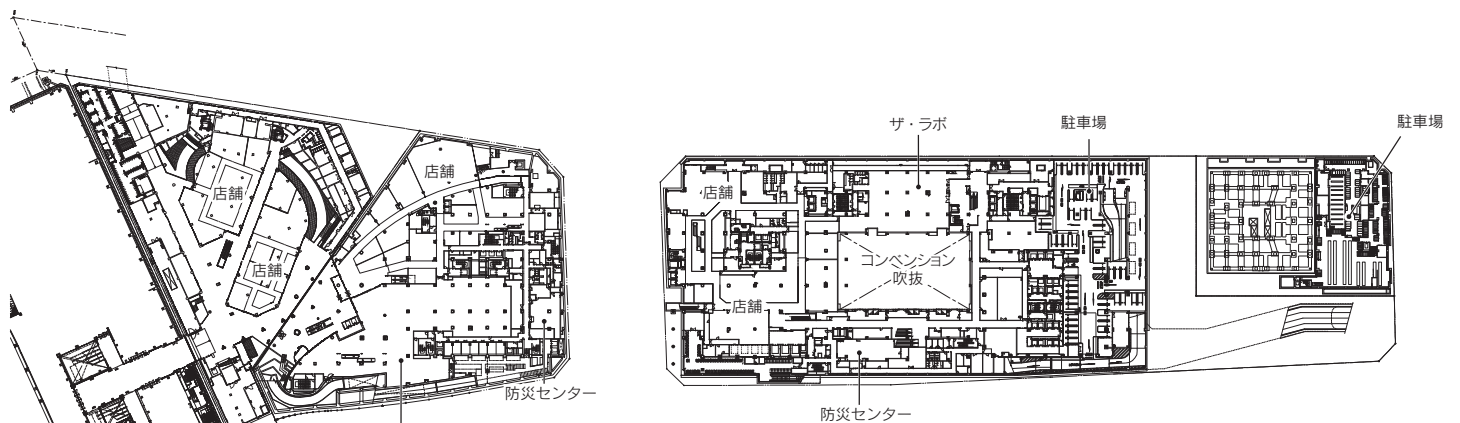
高層部基準階平面図 1/3,000



9階平面図 1/3,000



2階平面図 1/3,000



地下1階平面図 1/3,000

■■■■■ 計画概要

所在地

大阪市北区大深町

事業者

NTT都市開発 大林組 オリックス不動産
関電不動産 新日鉄興和不動産 積水ハウス
竹中工務店 東京建物 日本土地建物
阪急電鉄 三井住友信託銀行 三菱地所

全体統括設計・監理

日建設計＋三菱地所設計＋NTTファシリティーズ

施工

梅田北ヤード共同企業体総合事務所（大林組＋竹中工務店）

敷地

商業地域 防火地域 大阪駅北地区地区計画
都市再生特別地区

■大阪駅北口広場

主要用途

広場、多目的ホール、飲食店舗、物販店舗

設計・監理

うめきた広場 基本デザイン＋デザイン監修：安藤忠雄建築研究所、基本設計：日建設計、実施設計：日建設計＋大林組、監理：日建設計

うめきたSHIP、地下広場、うめきたセラー
基本設計：日建設計、実施設計：日建設計＋大林組、監理：日建設計
アート 霧の彫刻「SEA FOG」中谷芙二子＋高谷史郎

施工

総合：大林組＋竹中工務店
電気：ダイダン、関電工 空調：新日本空調、オーク設備工業 衛生：朝日工業社

規模

敷地面積：10,001.21㎡
建築面積：2,253.59㎡
延床面積：10,541.59㎡
階数：地下2階、地上2階

寸法

最高高さ：うめきたSHIP 13,350mm
主なスパン：地下広場 9,000mm×9,000mm

構造

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
杭・基礎／場所打ちコンクリート杭

設備

環境配慮技術：自然換気、地中熱利用、太陽光発電、水景、外気風量可変空調、雨水利用、南館より水融通
電気設備：高圧6.6kV 2回線受電方式
空調設備：ガス・電気併用中央熱源方式、地中熱利用、南館より熱源融通
衛生設備：受水槽＋加圧給水方式
昇降機：エレベータ×3、エスカレータ×4

特殊設備：広場 8chマルチ電気音響設備、イベント電源盤、SHIPホール 吊物設備

外部仕上げ

うめきたSHIP 屋根：アスファルト防水＋シンダーコンクリート、外壁：Low-Eガラス、構造体：鉄骨＋耐火塗料
うめきた広場 透水ブロック＋シンダーコンクリート＋花崗岩60角ピンコロ

主な内装仕上げ

床：カラーコンクリート研ぎ出し、壁：有孔ケイ酸カルシウム板＋塗装、コンクリートビション仕上げ天井：石膏ボード＋塗装

■南館・タワーA

主要用途

事務所、飲食店舗、物販店舗、ショールーム

設計・監理

基本設計：建築：三菱地所設計、設備：日建設計 実施設計：建築：三菱地所設計＋大林組、設備：日建設計＋大林組 監理：建築：三菱地所設計、設備：日建設計
外装コンサルタント：アラップ・ジャパニフレッシュサロン内装設計協力：メックデザイン・インターナショナル 照明設計協力：パナソニック

施工

総合：大林組＋竹中工務店
電気：きんでん、関電工、住友電設 空調：高砂熱学工業、朝日工業社、ダイダン 衛生：斎久工業、須賀工業

規模

敷地面積：10,571.09㎡
建築面積：8,609.94㎡
容積対象床面積：168,958.94㎡
延床面積：188,076.78㎡
階数：地下3階、地上38階、塔屋2階

寸法

最高高さ：179.359m
階高：高層棟4,100mm（天井高：2,800mm）
低層棟5,000mm（天井高：3,000mm）
主なスパン：7,200mm×15,800mm

構造

主体構造：鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎

外周部：H型鋼管杭（TRD工法）、一般部：節付場所打ちコンクリート杭

設備

環境配慮技術：エアインタークーラー＋外気導入機構によるクロスベンチレーション自然換気、太陽光発電、太陽追尾電動ブラインド、照明制御、水景、頂部潜熱排熱、ハイブリッド空調、雨水利用
電気設備：22kV 3回線スポットネットワーク引込、特高変圧器：ガス絶縁変圧器

7,500kVA×3台、非常用発電機：ガスタービン三相3線、6.6kV 2,000kVA×2台
空調設備：事務所：中央外気処理空調機＋各階空調機方式、店舗：外気処理空調機＋ファンコイルユニット方式
衛生設備：受水槽＋エリア毎高架水槽方式＋加圧給水方式併用
昇降機：エレベータ×43、エスカレータ×26
特殊設備：吊物設備

外部仕上げ

屋根：高層棟：アスファルト防水＋押えコンクリート 低層棟：屋上緑化・デッキ材
外壁 高層棟：アルミニウムサッシュ、Low-Eガラス、アルミニウムキャストエアインタークーラー 低層棟：アーキテクチュラルコンクリートPC・タイル打込PC、アルミニウムキャストルーバー

主な内装仕上げ

オフィス 床：OAフロアH＝100＋タイルカーペット 壁：石膏ボード＋塗装 天井：システム天井 低層共用部 床：天然石、タイル 壁：天然石、GRC、石膏ボード＋塗装 天井：石膏ボード＋塗装

■北館・タワーB

主要用途

事務所、ナレッジキャピタル（ショールーム、オフィス、シアター、コンベンション、カンファレンス、交流サロン）、飲食店舗、物販店舗

設計・監理

基本設計：日建設計 実施設計：日建設計＋竹中工務店 監理：日建設計
ナレッジサロン内装設計：日建スペースデザイン 外装PC設計協力：サムシング・ファイン 北館照明設計協力：ライティングM、パナソニック
プラザアート「Bio Screen」：川上喜三郎

施工

総合：竹中工務店＋大林組
電気：東光電気工事、トーエネック、協和エクシオ/NTT西日本JV／栗原工業
空調：新菱冷熱工業、東洋熱工業、三建設備工業、高砂熱学工業、テクノ菱和 衛生：西原衛生工業所、ダイダン、須賀工業、三晃空調、エス・エル

規模

敷地面積：22,680.05㎡（タワーC含む）
建築面積：15,760.24㎡（タワーC含む）
延床面積：295,511.60㎡（タワーC含む）
階数：地下3階、地上38階、塔屋2階

寸法

最高高さ：175.211m
階高さ：高層棟4,100mm、天井高さ2,800mm
低層棟5,000mm、天井高さ3,000mm

主なスパン：高層棟7,200mm×19,800mm、低層棟7,200mm×8,400、8,400mm×10,800mm

構造

鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎

外周部：H型鋼管杭（TRD工法）：一般部：多段拡径場所打ちコンクリート杭

設備

環境配慮技術：コーナーヴォイド＋外気導入機構による重力式自然換気、太陽光発電、太陽追尾電動ブラインド、照明制御、水景、頂部潜熱排熱、ハイブリッド空調、雨水利用電気設備：22kV 3回線スポットネットワーク引込、特高変圧器：ガス絶縁変圧器 12,000kVA×3台、非常用発電機：ガスタービン三相3線 6.6kV 3,000kVA×2台
空調設備：ガス・電気併用中央熱源方式、オフィス：中央外気処理空調機＋各階空調機方式、低層店舗：外気処理空調機＋ファンコイルユニット方式
衛生設備：受水槽＋エリア毎高架水槽方式・加圧給水方式併用
昇降機：エレベータ×45 エスカレータ×51
特殊設備：吊物設備、シアター：舞台機構設備、ロールバックチェア、ナレッジプラザ：イベント電源盤、8chマルチ電気音響設備

外部仕上げ

屋根 高層棟：アスファルト防水＋押えコンクリート 低層棟：屋上緑化・デッキ材
外壁：高層棟：アルミニウムサッシュ、Low-Eガラス 低層棟：アーキテクチュラルコンクリートPC・タイル打込PC、スチール垂鉛メッキリン酸処理

主な内装仕上げ

オフィス 床：OAフロアH=100＋タイルカーペット 壁：石膏ボード＋塗装 天井：システム天井
低層 床：カラーコンクリート研ぎ出し、タイル 壁：石膏ボード＋特殊塗装 天井：石膏ボード＋塗装

■タワーC

主要用途

ホテル サービスアパートメント 事務所

設計・監理

基本設計：NTTファシリティーズ 実施設計：NTTファシリティーズ＋竹中工務店
監理：NTTファシリティーズ
ホテル内装設計：NTTファシリティーズ＋イリア、ホテル照明デザイン協力：ライティング プランナーズ アソシエーツ、ホテルサイン設計協力：竹内デザイン
ホテルプロジェクトマネジメント：日建設計

施工

総合：竹中工務店＋大林組

電気：きんでん、住友電設、協和エレクトロ・NTT西日本JV、栗原工業、トーエネック、東光電気工事 空調：大気社、三建設備工業、新菱冷熱工業東洋熱工業 衛生：日比谷総合設備、三晃空調、西原衛生工業所、須賀工業、ダイダン

階数

地下3階 地上33階 塔屋2階

寸法

最高高さ：154.3m
階高さ：3,600mm（ホテル基準階）、4100mm（オフィス基準階） 天井高さ：2,400mm 2,900mm（ホテル標準客室） 2,800mm（オフィス基準階）
主なスパン：7,200mm×10,800mm（ホテル） 7,200mm×18,000mm（オフィス）

構造

主体構造：鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎

（北館・タワーBに含む）

設備

環境配慮技術：センターヴォイド＋外気導入機構による重力式自然換気、太陽追尾電動ブラインド、照明制御、頂部潜熱排熱、ハイブリッド空調、雨水利用
電気設備：タワーB特高電気室より各副電気室へ2回線引込、ホテル専用保安用発電機（ガスタービン三相3線 6.6kV 1,000kVA×1台）
空調設備：ホテル：モジュール式水冷チラー＋モジュール式潜熱回収型ボイラー
衛生設備：受水槽＋高架水槽方式、加圧給水方式併用
昇降機：エレベータ×22

外部仕上げ

屋根：アスファルト防水＋押えコンクリート 外壁：花崗岩打込みPC版、アルミニウムサッシュ Low-Eガラス

主な内装仕上げ

オフィス 床：OAフロアH=100＋タイルカーペット 壁：石膏ボード＋塗装 天井：システム天井 ホテル 床：天然石、カーペット 壁：天然石、不燃練付板 天井：石膏ボード＋塗装

客室数

272室（うちサービスアパートメント57室）

設計協力

広場・南館・北館・タワーA・B・Cサイン：八島デザイン事務所＋エモーショナルスペースデザイン
全体ランドスケープ：鳳コンサルタント環境デザイン研究所
広場・ナレッジプラザ電気音響：ADR

■グランフロント大阪オーナーズタワー

主要用途

共同住宅

設計

大阪駅北地区先行開発区域実施設計業務共同企業体（三菱地所設計＋竹中工務店＋大林組＋日建設計＋NTTファシリティーズ）
インテリアデザイン協力 メック・デザイン・インターナショナル

施工

総合：梅田北ヤード共同企業体（大林組＋竹中工務店）
電気：クリハラント 空調：鳳工業 衛生：鳳工業

規模

敷地面積 4665.59㎡
建築面積：3200.22㎡
延床面積：73797.10㎡
階数：地下1階 地上48階 塔屋2階

寸法

最高高 174.2m
主なスパン：6,100mm×5,850mm

構造

主体構造 鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、免震構造

杭・基礎

多段拡底場所打ちコンクリート杭

設備

環境配慮技術：太陽光発電パネル、太陽熱温水パネル、自然換気システム
電気設備：関電特高借室電気室に22kV受電共用系統は2FおよびRFに設置の自家用電気室より送電、住戸専用系統は基準階関電低圧借室電気室より送電
空調設備：電気式空冷ヒートポンプ方式
衛生設備：受水槽＋加圧給水方式、各戸別セントラル給湯方式、ガス熱源潜熱回収型給湯暖房熱源機
昇降機：エレベータ×11

外部仕上げ

屋根：アスファルト防水＋押えコンクリート 外壁：二丁掛タイル45二丁タイル、天然石、吹付タイル、塗装 開口部：アルミサッシュ＋ペアガラス

住戸数

525戸

構造計算適合性判定を 円滑に

「よくある質疑事項の解説」 発刊

大浦寛登

大阪府住宅まちづくり部建築指導室建築安全課
計画・指導グループ総括主査

大阪府では、構造計算適合性判定をより円滑に行うため、『大阪府内の構造計算適合性判定に係る「よくある質疑事項の解説」』を作成し、平成25年3月に発刊した。

発刊に至るまで

■発刊の背景

平成17年に発覚した構造計算書偽装問題の再発を防止する観点から建築確認・検査の厳格化を図るため、建築主事などが行う確認審査とは別に、「指定構造計算適合性判定機関」を都道府県知事が指定し、専門家が構造計算の適合性をチェックする構造計算適合性判定制度の創設などを柱とした建築基準法の一部改正が平成18年に行われ、平成19年6月20日に施行された。

大阪府では、指定構造計算適合性判定機関として、一般財団法人大阪建築防災センター、一般財団法人日本建築総合試験所、一般財団法人日本建築センターの3機関（以下、「適判機関」という。）を指定した。

適判機関では、建築主事や指定確認検査機関からの求めに応じて判定業務が行われ、建築物の安全・安心を確保する上で大きな役割を果たしてきた。

しかし、審査期間が長いことや審査にバラツキが見られることなどから、審査期間の短縮やバラツキの是正などについて、平成22年に国土交通省から建築確認手続き等の運用改善の方針が示された。

一方で、判定業務開始以降、各適判機関には、判定業務に伴う質疑について多くのデータが蓄積されてきた。

そこで、大阪府では、構造計算適合性判定をより円滑に行うという観点から、「判定業務の指摘内容の違いを防止する」とともに

「構造設計図書の品質の向上を図る」ため、「よくある質疑事項の解説」を発刊することとしたものである。

■適判事例集作成WGの開催

本書の作成にあたっては、これまで適判機関に蓄積された質疑を基に、大阪府や大阪市などの特定行政庁および大阪府を業務区域とする指定確認検査機関から構成される大阪府内建築行政連絡協議会（以下、「大連協」という。）および一般社団法人日本建築構造技術者協会関西支部の協力を得て、大阪府と適判機関が共同して取りまとめを行った。

取りまとめにあたっては、大連協の構造部会に設置した適判事例集作成ワーキンググループ（WG）を平成23年10月から平成25年2月まで計10回開催した。

■本書の構成

本書は、「第1部 注意喚起事項」と「第2部 構造設計上の諸問題とその考え方」の2部構成となっている。

■第1部 注意喚起事項

第1部は、構造設計図書を作成する際に、「構造計算の数値設定などにおいて特に注意を要する事項」や「説明が抜け落ちがちな事項」、「図書間で不整合を起こしやすい事項」など、注意していただきたい事項35項目について解説している。

これらの項目の中には、建築主事などの審査項目となっているものもあるが、構造計算適合性判定に際しても必要な項目であるため、該当する項目については構造設計図書に明示しなければならない。

判定時にこれらの項目が明示されていない場合は質疑の対象となるため、円滑な判定のためにも、明示の確認をしていただきたい。

■第2部 構造設計上の諸問題とその考え方

第2部は、構造設計者が「得てして陥り易い誤り」や「検討が不足しがちな事項」など55項目について解説を試みた。ここに記載された内容は必ずしも唯一の回答ではなく、あくまで構造設計者が個々の問題について考えを深めるための参考資料として取りまとめたものである。

しかし、その中でも法令や告示、あるいは「2007年版 建築物の構造関係技術基準解説書」や日本建築行政会議Q&Aなどで明記されており、順守する必要があるものについては、表題の欄に「A」と表記している。

また、同解説書やQ&Aなどでは概念的に示されているが詳しい記述が無い場合によっては判断が分かれる可能性があるものについては、表題の欄に「B」と表記している。

HPでの公表と説明会の開催

■ホームページでの公表

本書は大阪府建築安全課のホームページで公表しており、本書一式もしくは各項目ごとにダウンロードができるようになっている。ホームページは下記により検索ができる。

よくある質疑事項

検索

大阪府内特定行政庁、大阪府を業務区域とする指定確認検査機関、適判機関、公益社団法人大阪府建築士会、一般社団法人大阪府建築士事務所協会などのホームページからリンクできるようにしている。

■説明会の開催

本書の内容を広く周知するため、大連協では、平成25年4月から5月にかけて、特定行政庁・指定確認検査機関・建築構造設計者などを対象として、本書に関する説明会を3回実施し、約380名の方々にご参加いただいた。

また、本書の共同作成者である一般財団法人日本建築総合試験所でも、平成25年5月から6月にかけて、大津市、奈良市、和歌山市、京都市、岡山市、山口市、四国中央市の7箇所では本書に関する説明会を実施し、約360名の方々にご参加いただいた。



説明会の様子

■おわりに

本書の内容については、今後、法令、告示あるいは参考文献などの改訂などを踏まえ、必要に応じ、解説項目の追加や見直しを行っていく予定である。

なお、本書は大阪府内の構造計算適合性判定における質疑と解説を取りまとめたものであるため、他の都道府県において活用される際には、取り扱いに充分注意されたい。

構造設計者や確認検査機関の方々が、本書の趣旨を踏まえて活用され、本書がさらなる確認申請の円滑化および建築物の品質・信頼性向上に貢献することが期待される。

（おおうら ひろと）

冷房のこれまでとこれから

下田吉之

大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 教授

冷房は贅沢？

冷房が我々の生活の中に登場したのはそれほど古いことではない。アメリカで工場空調が始まったのは20世紀に入ってからのものであり、我が国で初めて冷凍装置を用いた空調が行われたのは1920年代、第二次大戦を挟んで冷房がデパートや高級オフィスに普及したのは1950年代頃と言われているので、我々の生活の中に冷房が入ってきたのはたかだか60年ほどのことである。統計によれば家庭用のルームエアコンディショナーの普及率が世帯で1台を超えたのは1990年頃である。(気温の高い近畿地方では少し早くて1980年過ぎである)。この冷房の歴史の短さは、ヨーロッパでの地域暖房の歴史が百数十年にならんとしていることと比較しても短い。

このような理由からか、いまだに冷房には贅沢なエネルギー消費という印象がつきまとう。東日本大震災以降の全国的な節電キャンペーンの中で冷房は「設定温度28℃」が常識化し、「可能であれば停止」することすら推奨されている。電力が提供している様々なエネルギーサービスの中で、他のサービスと比べて冷房がどの程度重要で無駄がどの程度あるかについて客観的な議論がされた事例は少ない。それ以前の温暖化対策の議論の中でも、「エネルギー消費を増大させた我々の生活レベルの向上」というときにはまず冷房が引き合いに出され、「地球環境に優しい生活」では、いかに冷房を避け、設定温度をどこまで上げるかが話題となっていた。家庭における年間のエネルギー消費の中で冷房の占める割合はたかだか数%程度であるが、一般にはエネルギー消費の過半を占めていると思われるようである。井上らのアンケート結果¹⁾によれば、30%の回答者が家庭のエネルギー消費の中で冷房用途の割合が最大だと誤解していた。

冷房技術の社会的的重要性

このようにエネルギーサービスの中で贅沢

品としての位置づけのある冷房であるが、実は現代のオフィスや住宅では必須なものとなっている。熱中症と言えば屋外での運動や作業の際に発生するものというイメージが強いが、筆者も参加した環境省の「平成17年度ヒートアイランド現象による環境影響に関する調査検討業務報告書」²⁾では、2005年の夏の大都市の救急搬送データの分析から、全体の3割程度が65歳以上の高齢者であること、発生場所は特に女性の高齢者で居室の割合が発生場所の半数以上となること、高齢ほど中等症・重症の割合が高いことなどが明らかにされており、温熱感覚が鈍り、水分の摂取を控えがちな高齢者が、冷房を行わない高温の室内環境下で熱中症を発症する状況が非常に危険であることを示唆している。熱中症に至らなくても、この節電下で暑さのために仕事の効率が落ちていることを認識しているオフィスワーカーは少なくないはずである。

このような冷房の社会的効用・必要性についてはまだまだ一般に認識されていないのではないかと危惧している。まずは専門技術者がこのような事実を社会へ積極的にアピールすべきである。

冷房を必要とする背景

始めに述べたように冷房の歴史はたかだか数十年であるが、この間冷房は生活やオフィスワークに必須なサービスとなっている。この背景には、住宅においては断熱気密化と家電の普及による内部発熱の増加、オフィスにおいては情報化の進展による内部発熱の増加に加え、開けられず、大きく、底の小さい窓の一般化、都市においてはヒートアイランド現象の深刻化(夏期昼間の気温上昇と熱帯夜の増加)、更には地球温暖化の進行(今後加速して2100年～2150年で地球の平均気温が1℃上昇すると予測されている)等がある。すなわち、冷房が必要になったのは最近数十年の建築・都市開発の発展がもたらした都市・建築環境の変化の影響であり、逆に冷房技術の発展がそれを助長してきたとも言える。多少の屋上緑化を施したところでまさに“焼け石に水”でしかない。

新しい冷房の形

冷房が一般の生活空間に浸透して数十年、その技術は大きく変化、発展してきた。家庭用ルームエアコンの効率は90年代半ばから20年で2倍以上向上したし、ターボ冷凍機等の業務用空調の熱源機もインバーター技術の発展などにより飛躍的にCOPが向上している。オフィスビルの空調に個別分散空調方式が浸透してきていることが話題となっているが、

その端緒が1980年代とすると、冒頭に示した冷房の歴史を踏まえれば、セントラル空調オンリーの時代と個別分散空調との競合の時代の長さにはそれほど差が無いことがわかる。

近年では、床下や家具を利用したパーソナル空調、天井を利用した比較的高温の熱媒による放射冷房、潜熱熱分離空調、さらには冷風を吹き出す椅子や空調服まで提案されている。また、クールビズも一つの社会的な技術選択とすれば、居住者に対して冷涼な環境を形成する技術の体系はまだ成熟・確立したわけではない様に思える。伝統的なセントラル空調においてもヒートシンクから熱源機、搬送系、空調機、室内環境に至るまでの全体システムが最適形で計画・運用されている状況にあるとは言いがたく、コミッションングなどによって大幅なエネルギー消費削減と快適性の向上が図れる事例が多数存在している。個別分散空調においても、それが建築の躯体や居住者の行動などと統合的にデザインされているかと言われるとこれからの課題の方が大きい。

また、スマートハウスやスマートオフィス、スマートコミュニティでのエネルギー需給を考える際、ピーク電力の大きな割合を占め、需要調整のポテンシャルが大きいのは冷房技術である。これからのエネルギーシステム改革の中で、電源確保の費用も考慮すれば冷房システム最適化の費用対効果は極めて大きい。

従って、エネルギー消費から冷熱の製造を経て居住者の快適性確保や機器の過熱防止を達成するまでのシステム技術としての冷房はまだこれから変化、発展していく可能性が高い。この技術が、熱力学から建築伝熱、生理学、心理学等を包含する学際領域であること、産業界においても電気・機械産業、建築業、家具、繊維・アパレルにまたがる業際的領域であることなどが障壁となって本当のシステムインテグレーションができていないのではないかと、という思いを強く感じている。これからの世界の発展の核がおおむね我が国より暑い地域であることを考えれば、冷房技術にもっとイノベーションがあっても良いのでは無いだろうか。(しもだ よしゆき)

●下田吉之

1985年大阪大学工学部環境工学科卒業。1990年大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修了。工学博士。大阪大学工学部助手、大阪大学先端科学技術共同研究センター助教授等を経て2007年より現職。専門：環境工学。

参考文献

- 1) 森原、井上、小熊、草刈、小林、酒井：アンケートによる住宅内エネルギー消費の実態に関する研究—地域別エネルギー消費量と居住者の認識—、日本建築学会大会学術講演梗概集環境系(2007)、pp. 175-176
- 2) 環境省：平成17年度ヒートアイランド現象による環境影響に関する調査検討業務報告書、平成18年3月、<http://www.env.go.jp/air/report/h18-06/index.html>

小澤 丈夫

—TAKEO OZAWA—



TEO architects にて

建築家の職能を考える

1997年、神戸御影に設計事務所TEO architectsを設立。社員寮、ホテル、商業施設、住宅と設計活動が続けるうちに「オランダで考えたことや、大手ゼネコン、海外事務所、個人事務所と異なる立場で設計をしてきたことを、研究と教育を通じて社会に還元できないかと思い始めた」という。スイス連邦工科大学（ETH）やアムステルダムにあるベルラーヘ・インスティテュートで自身が経験してきた「建築家が教育の場で学生に伝える」ことを実践しようとした。

2005年に北海道大学に着任。やがて、建築家や計画家の職能・役割・あるべき姿を考える視点から、研究テーマのひとつとして「建築家教育」「設計者選定の仕組み」に着手した。

近年では、「建築家教育」の研究として、アムステルダム建築アカデミーとデルフト工科大学を事例としてとりあげ、ヨーロッパの建築家教育におけるシステム、理念、手法について調査した。

アムステルダム建築アカデミーでは「建築教育は、コミュニケーションの場にあるという原点を気づかせてくれた」という。同アカデミーには、議論をするための会議室はあっても、製図室など個人が作業をするための部屋はない。一方、設計実務に携わりながら夜間に通学する数十名の学生に対し、非常勤を主体とした教員数は370人を超える。教育の場が、学生と教員双方にとって、優れたコミュニケーションの場となっていることを目の当たりにしたという。

デルフト工科大学で特徴的であったのは、学部3年と修士2年の計5年間をひとまとまりにした教育を体系的に組み立てていることと、教育プログラムの中にファイナンスやマネジメントに関するプログラムが含まれていることがある。広い視野を持った実践的な実務者を、5年間かけてじっくりと育てることを目的としていることが読み取れる。

「建築家にとって大事なものは、多様な見識と深い洞察力を備え、大きな方向性を見失うことなく、異なる意見や考え方をとりまとめることができる能力だと思うが、日本の建築教育では、その能力を養う仕組みになっていない。そこに取り組まないと、実務者教育のレベルが上がってこないし、次の世代が育たないと建築家の役割が社会の中で弱くなっていくという悪循環に陥る。必要なことは広い視野を持った実践的な実務能力を備えた人材を、世の中に送り出していくことだ。」と今後の課題を示された。

「設計者選定の仕組み」の研究では「プロポーザルという制度が一般化しているが、公共建築を作るときに発注者である行政がどういう仕組みで設計者を選び、選定後もどれだけ設計者に裁量を持たせて業務を依頼しているのかがよくわからない」との疑問がきっかけとなっている。国土交通省により示されたガイドラインを参照しながらも、市町村や自治体が、どのようにこの点を考え、運用しているかの実態を調査されているという。

これらの調査研究活動と並行して実践的な取り組みも進行中である。北海道のある地域において、行政と一体となった地域づくりのための調査やプロジェクトにも取り組んでいる。

留学経験や国内外での実務経験に基づいた、「建築家の職能」や「実務者教育」への真摯な取り組みについて伺うことができた。

経歴

- 1961年 兵庫県芦屋市生まれ。
- 1984年 東京工業大学工学部建築学科卒業。
- 1985-86年 スイス連邦工科大学（チューリッヒ）研究生（スイス政府給費奨学生）。
- 1987年 東京工業大学大学院修士課程修了。
- 1987-93年 株式会社大林組東京本社設計部勤務。
- 1994-97年 ヘルマン・ヘルツベルハー設計事務所（アムステルダム）勤務。
- 1996年 ベルラーヘ・インスティテュート（アムステルダム）修了。
（オランダ政府給費奨学生、IKEA foundation奨学生）
- 1997年 小澤エリ子と共にTEO architects 設立。
- 2005年- 北海道大学大学院准教授。

聞き手 三矢大祐（東畑建築事務所）
写真撮影 河合止揚

千里山住宅地

和田 康由

再読

関西近代建築
モダンエイジの建築遺産

所在地／吹田市千里山西1丁目～6丁目
設計／都市研究会、大阪住宅経営株式会社、大阪住宅経営株式会社顧問
京都帝国大学教授高橋逸夫、技師長・日本建築協会理事葛野壮一郎
施工／大阪住宅経営株式会社、株式会社安達工務店
竣工／大正9年～13年（1920年～1924年）
構造／木造
規模／平家、二階建て
種別／住宅地

■千里山住宅地開発の背景

第一次世界大戦が終結した大正7年前後には、国の富国強兵政策や産業の発達、戦後の好景気も手伝って都市に人口が集中し全国的に住宅難が社会問題化していた。政府は、良好な住環境を創り出すために同年11月小住宅改良要綱の答申、同8年4月都市計画法と市街地建築物法の公布、昭和2年3月には不良住宅地区改良法の公布などの法整備を行った。さらに、大正期から住宅建設資金として低利資金の貸出を打ち出し、主要都市には公営の貸し長屋や共同宿泊所などを建設するとともに、労働者向けの貸家供給を推進するための住宅組合法を同10年4月に公布するなどの政策をとった。

一方、建築界では、同5年橋口信助を中心とする住宅改良会、同6年片岡安を中心とする日本建築協会（以下協会）や後藤新平、池田宏を中心とする都市研究会などが立て続けに設立される。これらの組織は住宅難緩和、住宅改良・生活改善の実行やイギリス人社会改良家のエベネザー・ハワードが提唱した田園都市論の実現などを目指していた。千里山住宅地（以下千里山）はこれら社会背景となる要素が織りなすわが国を代表する大正期の住宅地開発であった。

■千里山を開発した大阪住宅経営株式会社と住宅建築資金

大阪住宅経営（株）（大正9年3月10日設立）は住宅経営に際し大阪市の住宅建築資金の低利資金20年賦の貸付を受けている。この住宅建築資金の貸付を受けた住宅会社は、大阪住

宅経営（株）に加えて安治川土地（株）（同6年12月22日設立）と大阪北港（株）（同8年12月24日設立）の3社のみである。同11年の時点での貸付予定額は、大阪住宅経営が3社の内最も多く150万円、低利資金による建築予定数も428戸と最も多い。大阪住宅経営（株）の運営による住宅難緩和がいかに期待されていたかといえる証である。このことが住宅地の公共性を高めた要因とも考えられる。低利資金150万円の使途については、100余万円は千里山住宅地の貸家の建築費に充当し、40万円は東成郡田辺町大字松原（現大阪市東住吉区山坂町）の土地1万6千坪の買収と180余戸の貸家の建築に充てたとされている。

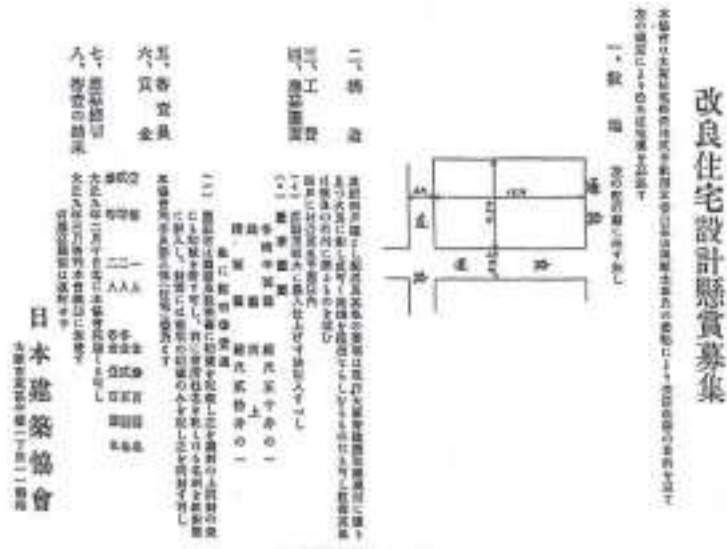
■大阪住宅経営株式会社と北大阪電気鉄道株式会社

山岡順太郎は大正6年第八代大阪商業会議所会頭に就任した時から、経済界の発展のためには会社等に勤める人達の住宅を確保することが急務であると考え、林市蔵大阪府知事、池上四郎大阪市長を主唱発起人とし、住宅経営実務家牧義朝の献策を容れ、商業会議所議員等大阪財界の有力者を募って、同9年3月10日資本金1千万円の大阪住宅経営（株）を設立した。会社の主目的は「住宅を建築して之を賃貸すること」、その定款には「株主に対する毎期利益配当は年六厘を越ゆることを得ず」とし公共性の強い性格を打ち出している。このことは、E.ハワードの田園都市論と共通するといえよう。

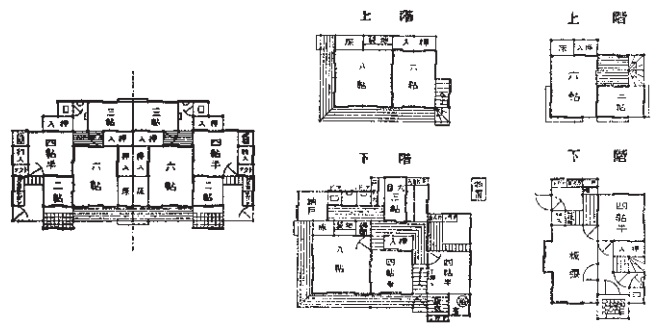
さて、北大阪電鉄（株）は主に天神橋筋六丁目～千里山間の鉄道営業を目的に掲げ、秋岡義



①4間幅のメイン道路（北を見る）／撮影：和田康由（以下※印）



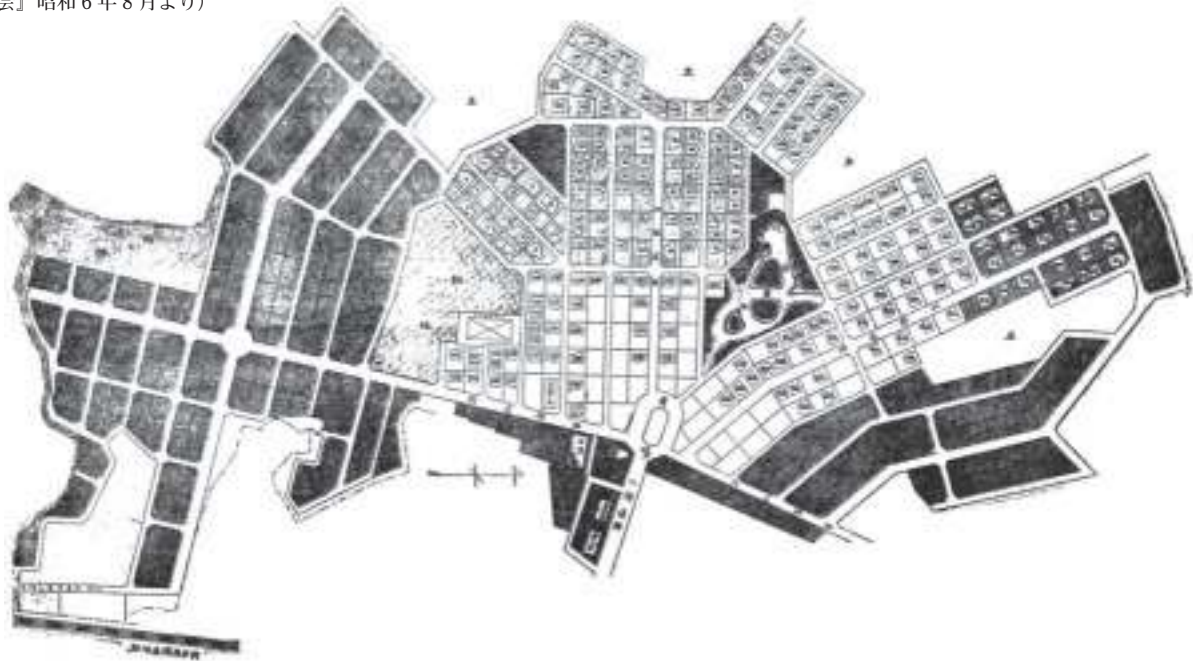
③



④

⑤

⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

⑩「千里山住宅地平面図」所蔵堀田暁生氏

⑪駅前から中央広場までの6間幅道路※

⑫中央広場※

⑬石垣の例※

⑭二階建て二戸建て住宅※（現存しない）

⑮開発時の住宅を住民が昭和13年に改造した住宅※ 登録有形文化財（平成18年10月）

⑯第1期噴水※

⑰第2期噴水※

⑱千里山開発記念碑※

⑲住宅地を見下ろす千里山神社とそれ隣接する水道施設（吹田市水道部管理）がある。※

⑳現在の千里山会館※



⑪



⑫



⑬



⑭



⑯



⑰



⑲



⑮



⑱



⑳

一らが同7年11月24日に設立し社長に就任した。その起業趣意書には千里山の丘陵開発などが意図され路線決定の重要な要因になっていた。大阪住宅経営(株)は北大阪電鉄(株)が所有する千里山の土地103,700坪のうち「田園都市」を設営することで98,300坪を譲り受け、宅地開発を行った。これを「千里山住宅地」と呼んでいる。

千里山の開発は北大阪電鉄設立の主たる目的であり、鉄道開業を目前とした同9年1月同社は都市研究会宛に大阪市外吹田村付近約百万坪の規模で田園都市の設計を依頼している。この経緯は機関紙『都市公論』（同8～10年）に詳しい。翌2月住居経営地を実査して「高級の住宅地たるに応はしい」と評している。同年5月「北大阪電鉄住宅経営案」として発表され、翌10年1月には設計が完了したと思われる。都市研究会理事池田宏を筆頭に、技師笠原敏郎、山田博愛、柳澤彰らと大阪住宅経営(株)顧問の大学教授らが設計・立案したとある。その上、千里山開発記念碑には技師長として日本建築協会理事葛野壮一郎が、「大阪住宅経営(株)の創立計画」『東洋経済新報 第879 大正9年1月』には設計技術者として京都帝国大学土木学科高橋逸夫の名が登場するなどこの開発には東西の実力者が結集していた。

いずれにしても、計画内容の詳細は伝わっていないが、内容の大綱は大阪住宅経営(株)に引き継がれたものと考えられる。これとは別に山岡は、千里山の開発と平行して当時親交のあった文部大臣中橋徳五郎に働きかけ、法律学校であった関西大学を総合大学に昇格させ、千里山に学舎の敷地を誘致した。このように千里山の開発は大阪住宅経営(株)と北大阪電気鉄道(株)の関係者によって進められた。

■大阪住宅経営株式会社と日本建築協会

大阪住宅経営(株)は創立委員長の山岡順太郎の発案により、創立に先立って「生活改善の目的」として、協会に「改良住宅設計懸賞」を委嘱した。協会は、大正8年12月5日理事会で募集と審査を引受け、同月9日第三部委員会（住宅委員）で募集内容を協議・確定し、同9年1月に機関紙に発表する手際の良さであった。その内容は、敷地規模は112.5坪（東西15間×南北7.5間）、道路幅員は東西道路2.5間、南北道路2間、住宅は連続四戸建、大阪府建築取締規則に準拠し、費用は四戸に付き1万5千円以内、締切同9年2月などの条件で改良住宅案を募集するものであった。審査委員は協会理事片岡安及び小笠原鋤を委員長とする第三部委員会であった。応募数は104点あり、審査会は3回行われ5点が選ばれた。

当選案は協会の機関誌の口絵に数度掲載されたり、授与式では大阪市中央公会堂で展覧されたり、桜楓会大阪支部主催の生活改造博覧会にも出品された。このように、大阪市内の貸家の中で最も多い長屋を設計条件とした取組みは、わが国において初めてのことであり、その後の住宅改良・生活改善や大阪の長屋に与えた影響は少なくない。

大阪住宅経営(株)は同11年9月21日～11月26日に開催された協会主催大阪箕面桜ヶ丘住宅改造博覧会の場を利用して「簡易生活を目的とする改良住宅」と題し「愉快に便利に二重生活を緩和して簡易生活を為し得る最小住宅の標本たることを目的」とする提案や協会が出品した8棟の施工を行った。また、昭和3年11月の解散直前においても協会主催建築知識普及展覧会（会期同3年9月11日～16日会場大丸）に住宅設計図及び写真を出品し、工員や中堅サラリーマンの住宅像を追い求めていた。これらの成果は、千里山と田辺町住宅地に和風の二戸建て貸家住宅と改良住宅として反映されているが、当選案のような四戸建ては建設されていない。ただ、大阪北港(株)の住宅経営には協会の住宅委員長小笠原が街区、二戸建てや四戸建て住宅などを設計し建設したことで、協会が同10年実施した四戸建て懸賞の成果とともに改良住宅の模範を示したといえる。

■千里山の住宅地の概要

北大阪電鉄が「都市研究会」に依頼した田園都市構想を示す図面は見当たらないが、「千里山住宅地平面図」（色刷り：所蔵堀田暁生氏）のようなものは数点現存し、有力な資料である。それによると、全体像は緩い傾斜のある丘陵地で、千里山駅から少し登った位置に花壇（現在噴水）のあるロータリー風の広場を設け、その広場を中心に4間道路など直線の道路が放射状に伸び、さらに北部と南部に小ロータリーを配置し「田園都市」をイメージさせるような街区構成である。電気・瓦斯・下水道完備は当時最も先進的な内容であった。ロビー撞球設備を持つ会館やテニスコートなども設置されていた。

住宅・住宅地の売出状況は、協会発行機関紙に郊邨「住宅 千里山のいにい邑より＝土地住宅会社行脚（A）＝」（大正12年9月）と題して紹介され、住宅配置図や住宅平面図などが掲載されている。それらが経営地を紹介する初期のものである。

「千里山住宅地平面図」（色刷り）は同12年末から13年頃のものと考えられ、その図には、「住宅郊外生活の理想郷」「宅地の格安分譲」「住宅案内」、「貸家は」「売家は」「電車運転時

間の比較」など経営内容を詳しく宣伝している。さらに、北部にロータリーのある区域を追加した「大阪住宅経営千里山住宅地平面図」（色刷り）があり、そこでも「郊外生活の理想郷」「総面積十七万余坪」「現在既成住宅四百戸以上」「上水道供給能力参千戸以上」や「当社ノ主ナル株主」など住宅地の内容と発展状況を示している。

平均的な宅地規模は1街区平均10等分、1区画70坪から80坪、住宅は建坪10坪から36坪、20坪前後のものが最も多く、日本式と改良式がある。大半は一戸建てであるが二戸建が14%程度貸家として建設されている。

■千里山住宅地の評価

評価を協会機関紙でみると、郊邨「住宅千里山のいにい邑より＝土地住宅会社行脚（A）＝」（大正12年9月）では、田園都市と呼ぶには間が抜け、文化村と謂うには安っぽい、郊外住宅だとごちない、だから「千里山のいにい邑」とし単なる新しい邑と捉えているとされる。一方、加藤善吉「都市と住地と住宅」（昭和6年8月）には、千里山丘陵地及び付近一帯は、土地高燥、風物快適、将来高級住宅地に好適と紹介されるなど、意見が分かれる。いずれにしても千里山は、日本建築協会と都市研究会と政財界が協力して、住宅難緩和や住宅改良・生活改善などを実現した郊外住宅地であったことは確かであろう。

起伏に富んだ丘陵地の頂には、住宅地を見守る千里山神社とそれに隣接して当時3千戸以上の供給を誇った水道設備（現吹田市水道部管理）が保全されるとともに、登録有形文化財に指定された住宅を含め百棟以上の当時の住宅に加えて生垣、レンガ塀、石垣などが現存する。その上、千里山自治会によって平成2年11月『千里山70年のあゆみ』が編集発行されるなど千里山会館を拠点に住民の結束によって魅力ある住環境が保たれている。以上のように、千里山は日本の近代住宅政策史上重要な価値を持つ住宅地として今までどおり保存・活用される存在である。

主な参考文献

- ①和田康由、寺内信「山岡順太郎と大阪住宅経営株式会社」『日本建築学会計画系論文集 第486号』pp. 167-176 1996年8月
- ②和田康由、寺内信「山岡順太郎と住宅経営論」『日本建築学会計画系論文集 第488号』pp. 187-194 1996年10月
- ③関西大学学報局『千里山学報』大正12年9月
- ④大阪市『大阪市立社会事業概要（大正11年）
- ⑤吹田市役所『吹田市史第3巻』平成元年
- ⑥都市研究会『都市公論』（大正8～10年）

（わだやす やすよし／

大阪市立都島第二工業高等学校 建築科）

①企画展

鉋鍛冶—碓氷健吾の仕事—

よい仕事のためにはよい道具が必要。では、「よい道具」とは何なのか。大工の厳しい要求に応えた鍛冶の技は一般にあまり知られていない。新潟県与板に碓氷健吾という鍛冶がいた。鉋づくりに人生を捧げた職人である。経験と感覚に頼ることが多い職人技を科学的に解析した功績は多くの後進の範となった。本展では、『鉋』という道具がどのようにつくられるのか、碓氷健吾の鍛冶人生を通して紹介する。

期 間 8月6日(火)～9月29日(日)

9:30～16:30 (入館は16:00まで)

休館日 月曜日、9/17、9/24 (9/16、9/23は開館)

会 場 竹中大工道具館

神戸市中央区中山手通4-18-25

TEL.078-242-0216

観覧料 一般300円、大高生200円、

中小生100円

■記念セミナー

「碓氷健吾氏から受け継いだ伝統の技と心」

日 時 9月22日(日) 13:30～15:00

講 師 船津祐司氏 (舟弘刃物製作所)

会 場 ラッセホール

定 員 100名

聴講料 無料

申込み 〈ホームページ〉鉋鍛冶展公式サイト
(<http://www.dougukan.jp/usui/>) イベントページより。

〈往復ハガキ〉往復ハガキに、イベント名、氏名(フリガナ)、郵便番号、住所、電話番号を往信用裏面に記入の上、上記住所竹中大工道具館「鍛冶屋イベント係」まで

締 切 9月7日(土)必着



鍛冶場再現展示 (写真提供: 削ろう会)

②フランス国立クリュニー中世美術館所蔵 貴婦人と一角獣展

フランス国立クリュニー中世美術館の至宝《貴婦人と一角獣》は、西暦1500年頃の制作とされる6面の連作タピスリー。千花文様(ミルフルール)が目にも鮮やかな大作のうち5面は、「触覚」「味覚」「嗅覚」「聴覚」「視覚」と人間の五感を表わしているが、残る1面「我が唯一の望み」が何を意味するかについては、「愛」「知性」「結婚」など諸説あり、いまだ謎に包まれている。本展は、この中世ヨーロッパ美術の最高傑作の誉れ高い《貴婦人と一角獣》連作の6面すべてを日本で初公開。タピスリーに描かれた貴婦人や動植物などのモチーフを、関連する彫刻、装身具、ステンドグラスなどで読みといていく。クリュニー中世美術館の珠玉のコレクションから厳選された約40点を通して、中世ヨーロッパに花開いた華麗で典雅な美の世界を紹介。



タピスリー《貴婦人と一角獣「我が唯一の望み」》1500年頃 羊毛、絹
©RMN-Grand Palais (musée de Cluny - musée national du Moyen-Âge) / Michel Urtado/distributed by AMF

期 間 10月20日(日)まで

10:00～17:00

金曜日は19:00まで

(入場は閉館30分前まで)

休館日 月曜日、9/17、9/24、10/15

(8/12、9/16、9/23、10/14は開館)

会 場 国立国際美術館 B3階展示場

大阪市北区中之島4-2-55

TEL.06-6447-4680

観覧料 一般1,500円、大学生1,200円、

高校生600円、中学生以下無料

■記念講演会

「《貴婦人と一角獣》のタピスリーを読み解く」

日 時 9月14日(土) 14:00～

講 師 木俣元一氏

(名古屋大学大学院文学研究科教授)

会 場 国立国際美術館地下1階講堂

定 員 130名(当日10:00より整理券配布)

聴講料 無料(観覧券が必要)

③アメリカン・ポップ・アート展

アメリカのポップ・アートは、1960年代以降、現代に至るまで、様々な面で美術や文化に大きな影響を与えてきた。コロラド州を本拠地とするジョン・アンド・キミコ・パワーズ夫妻は、ポップ・アートが評価を確立する以前からその真価を見抜き、パトロンとして作家を直接支援することによって、アート・シーンに大きく貢献するとともに、個人所蔵としては世界最大級のポップ・アート・コレクションを築き上げた。本展は、夫妻のコレクションの中から、アンディ・ウォーホルの最高傑作《200個のキャンベル・スープ缶》をはじめ、ラウシェンバーグ、ジョーンズ、リキテンスタイン、オルデンバーグ、ローゼンクイスト、ウェッセルマンら、巨匠たちの1960年代の傑作も含む、絵画、彫刻、素描、版画等、約200点により、アメリカン・ポップ・アートを総合的に紹介する。

期 間 8月7日(水)～10月21日(月)

10:00～18:00

金曜日は20:00まで

(入場は閉館30分前まで)

休館日 火曜日

会 場 国立新美術館 企画展示室2E

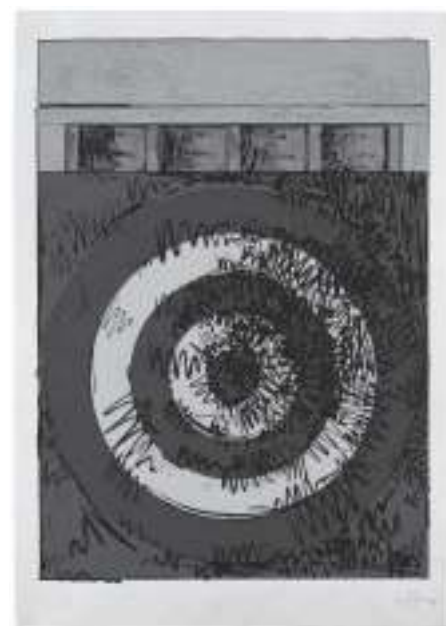
東京都港区六本木7-22-2

TEL.03-5777-8600

(ハローダイヤル)

観覧料 一般1,500円、大学生1,200円、

高校生800円、中学生以下無料



ジャスパー・ジョーンズ《4つの顔のある標的》1968年、92.1×66.7cm
シルクスクリーン/紙、The Ryobi Foundation 蔵
©Jasper Johns/VAGA, N. Y. & JASPAR, Tokyo, 2013 E0312

④2013 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展

イタリア・ボローニャ国際絵本原画展は、世界で唯一の子どもの本専門の国際見本市、ボローニャ・ブックフェアに併設された絵本原画のコンクール展入選作品で構成されている。5点1組にしたイラストを応募すれば誰でも審査を受けられる公募展で、すでに絵本として発表された作品も、未発表のものも全て平等に扱われる。今日の世界の絵本の動向を知ることが出来る展覧会として知られている。今年は64カ国31447名が応募、日本人16名を含む24ヶ国77名の作家が入選。それぞれの技法で様々な物語世界を作り上げている。また、ボローニャ・ブックフェアの開催50周年を記念して企画された展覧会「ボローニャ発世界へー絵本作家たちの挑戦」を特別展示として紹介する。

期 間 8月17日(土)～9月23日(月・祝)

10:00～17:00

金曜日は19:00まで

(入館は閉館30分前まで)

休館日 水曜日

会 場 西宮市大谷記念美術館

西宮市中浜町4-38

TEL.0798-33-0164

観覧料 一般800円、大高生600円

中小生400円



《わたしはみんなとちがう だからこそ幸せ》
バーサンスレン・ボロルマー (モンゴル)

⑤特別展「女性たちの物語」～松園のモデルとなった才女たち～

女性美を追及し独自の美人画を展開した松園。そんな彼女が好んで描いた美人に、物語や歴史上に伝わる才女たちの姿がある。小野小町や静御前、楊貴妃など、美しい容姿と教養を兼ね備えた彼女たちは松園にとって理想の女性像であり、また心の友として松園を支える大切な存在でもあった。「心と心が無言のうちに相通じる」残された言葉にたがわず、親しみを込めて描かれた叡智あふれる女性像を紹介する。

期 間 8月13日(火)～10月14日(月・祝)
10:00～17:00 (入館は16:00まで)

休館日 月曜日、9/17、9/24

(9/16、9/23、10/14は開館)

会 場 松伯美術館

奈良市登美ヶ丘2-1-4

TEL.0742-41-6666

観覧料 一般(大高生含む)1,000円、

中小生500円



上村松園「男舞之図」 名都美術館蔵

⑥大野麥風展

日本画家 大野^{ぼくふう}麥風は、1937年に出版された代表作『大日本魚類画集』で、原画を担当し、当代一流の文化人の協力を得て、「原色木版二百度手摺り」といわれる色鮮やかな木版画集を生み出した。麥風は水族館では飽き足らず、和歌浦沖で潜水艇に乗り、魚の生態を観察し、細部にまでこだわった作品を作り上げた。本展では、魚を細かに観察して作られた『大日本魚類画集』全72点といきいきとした魚類や国内外の風景、愛らしい小動物などを描いた大野麥風の作品を展覧する。

期 間 9月23日(月・祝)まで

10:00～18:00 金曜日は20:00まで

(入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日、9/17 (9/16、9/23は開館)

会 場 東京ステーションギャラリー

東京都千代田区丸の内1-9-1

TEL.03-3212-2485

観覧料 一般900円、高大生700円、

小中生400円



《飛魚》(『大日本魚類画集』より)
1938年1月 姫路市立美術館蔵

▶医療福祉建築賞2013 募集

医療福祉建築賞は優れた医療福祉建築を顕彰し、広く世に知らせることによって、これら施設の質の向上をはかることを目的とする。優れた医療福祉建築とは、建築として質が高いことに加えて、利用者ならびに職員にとって快適で使い勝手がよいことを条件とする。

●対象

2010年4月1日から2012年3月31日までの2年間に日本国内において新築、増改築または改修を行なった医療・福祉・保健施設ならびにその関連施設とする。

●応募資格

当該施設の開設者または管理者、設計者のどちらでもよい。ただし、選考委員または委員の所属する組織が計画・設計・運営に関与している施設は応募できない(当該施設は委員の任期終了後に応募することができる)。

●選考のための提出資料

- (1) 所定の応募申込書ならびに建築概要書
- (2) 設計主旨
- (3) 図面 配置図・平面図・断面図など、大きさはA3判。
- (4) 写真15葉程度とし、周辺環境がわかるものを含むこと。また、室内については家具・機器等が設置されていること。大きさは任意。

上記(1)～(4)をA3判クリアファイル1冊におさめて提出のこと。なお、それらをPDF化しCD等に収めたデータを同時に提出。

●応募期日

2013年8月20日から同年8月30日まで。

当日消印有効。

●提出先

一般社団法人 日本医療福祉建築協会

住 所 〒108-0014 東京都港区芝5-26-20

建築会館

TEL.03-3453-9904 FAX.03-3453-7573

●応募料

応募者は1作品につき6万円を応募料として応募時に納入。

●選考

7名の委員で構成される選考委員会によって「趣旨」に沿った判断にもとづいて行なう。選考過程で必要に応じて現地調査を行なう。

●問合わせ

E-mail:jiha@mars.dti.ne.jpまで。

詳細は下記サイトを参照。応募書類はダウンロードできる。

<http://www.jiha.jp>

本欄掲載の①～⑥の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(80円)を日本建築協会事務局までお送りください。

特集：グランフロント大阪

協賛広告目次

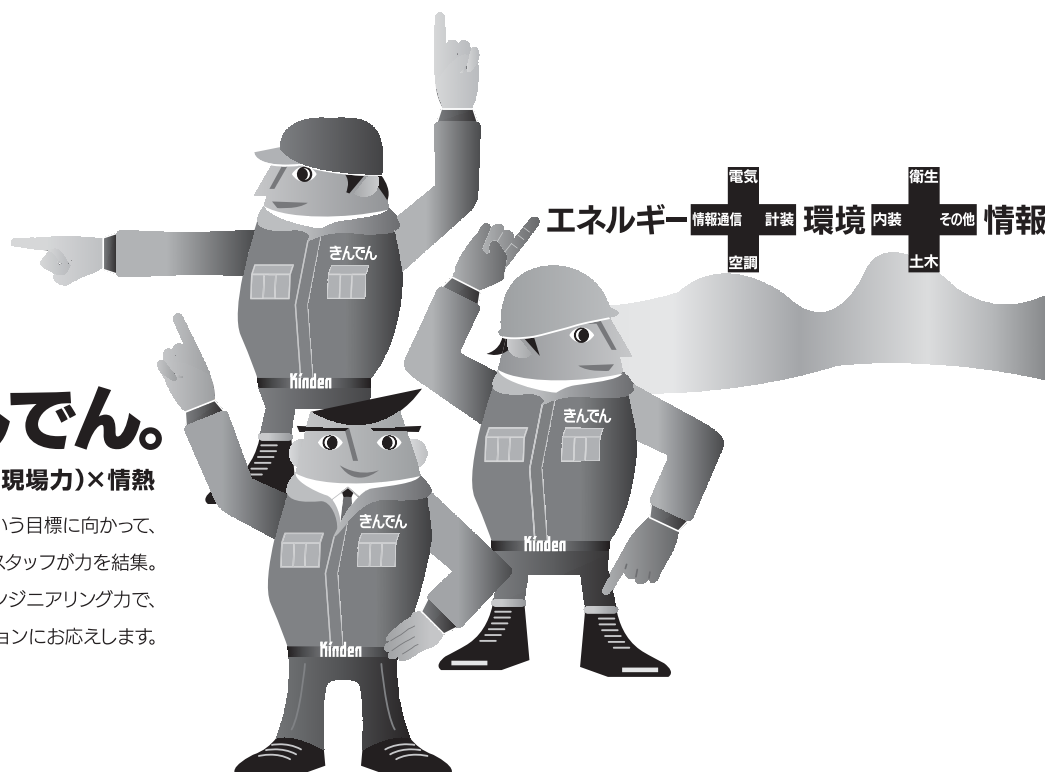
(株)大林組	（表紙2面掲載）
(株)竹中工務店	（表紙4面掲載）
(株)きんでん	50
東リ(株)	50
ナブテスコ(株)・ナブコドア(株)	51
石村硝子(株)	51
(株)石渡康三郎塗装店	51
(株)エス・エル	52
鳳工業(株)	52
(株)亀井組	52
(株)スミノエ	52
ダイハツディーゼル(株)	53
(株)大協建材	53
高橋カーテンウォール工業(株)	53
東芝エレベータ(株)	53
東陽商事(株)	54
南晃工業(株)	54
パルマスティーリザ・ジャパン(株)	54
(株)平田タイル	54

Kinden

チーム、きんでん。

(施工力+技術力+現場力)×情熱

“お客さま満足”という目標に向かって、
さまざまなスタッフが力を結集。
人間力を基盤とした総合エンジニアリング力で、
あらゆるソリューションにお応えします。



本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 東京本社 東京都千代田区九段南2丁目1番21号
TEL.06-6375-6000 TEL.03-5210-7272
<http://www.kinden.co.jp/>

きんでん

TOLI GRAPHIC TILE CARPET

Japan Design

日本人の豊かな感性を刺激する

“ジャパニデザイン”をテーマに創り上げられた

東リ グラフィックタイルカーペット“GXシリーズ”。

その多彩なラインナップで気持ちいい空気感、心地よいインテリアをご提案します。

GX



<http://www.toli.co.jp>

東リ株式会社

西日本営業開発部 TEL 06(6943)1645
東日本営業開発部 TEL 03(5403)2067

札幌ショールーム TEL 011(833)1730
名古屋ショールーム TEL 052(745)1691

東京ショールーム TEL 03(5421)3711
大阪ショールーム TEL 06(6943)1649

Nabtesco



次はどんな自動ドア？

ナブコ自動ドア 

西日本地区販売会社 **ナブコドア株式会社** ☎(06) 6532-5841
<http://www.nabco-door.co.jp/>

製造元
ナブテスコ株式会社
住環境カンパニー
<http://nabco.nabtesco.com>



創業明治8年
光の空間を演出する

石村硝子株式会社

代表取締役 石村 幸夫 専務 石村 幸久

〒612-0029 京都市伏見区深草西浦町8丁目142番地

TEL 075-641-8115 FAX 075-641-8020

E-mail: ishimura@carrot.ocn.ne.jp

塗装工事・吹付工事



株式会社 石渡康三郎塗装店

代表取締役社長 石渡 年樹

〒545-0022 大阪市阿倍野区播磨町2丁目6番1号 TEL.06-6693-2031 FAX.06-6693-2039
(営業所兼倉庫)

〒547-0024 大阪市平野区瓜破4-2-24 TEL.06-6709-8184

E-mail: ishiwatari-main@ipc-k.com / <http://ipc-k.com>

エス・エルは、水の再生・再利用で
自然環境との共生を目指します。

[プラント設計・施工・維持管理]
厨房・雑排水再生水処理設備
医療系排水処理設備
各種工場排水処理設備

グランフロント大阪 厨房除害再生水利用設備

Aブロック 375m³/日

Bブロック 456m³/日

水と人の共生をめざす

株式会社 エス・エル

<http://www.kk-sl.co.jp>



中空系膜ユニット



本社 〒553-0005 大阪市福島区野田5丁目17番22号(大拓ビル)
電話:06-6468-7180 FAX:06-6468-7104
東京支店 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町
1丁目34番地4(神田グロウビル)
電話:03-5256-8855 FAX:03-5256-8905

鳳工業株式会社

すべての人が、快適に暮らせる新しい都市環境へ。

鳳工業は、経験豊かな人材と最先端のテクノロジーを基本に、多彩な事業を展開し、人と都市の『夢』を実現します。

総合設備工事 ・ ガス工事 ・ 土木舗装工事

(本社) 〒554-0002 大阪市此花区伝法4丁目3番59号
TEL (06) 6464-6868 FAX (06) 6464-6855
(営業所) 大阪、京都、神戸、奈良、吹田、北摂、東大阪、高石
<http://www.ohtorikogyo.co.jp/>

おかげさまで 100 周年

左官工事



株式会社 亀井組

〒530-0016 大阪市北区中崎2丁目1番17号
TEL.06-6371-1871 FAX.06-6371-1886
〒153-0064 東京都目黒区下目黒2-22-19
TEL.03-3492-8301 FAX.03-3494-8023

循環型リサイクルタイルカーペット「ECOS」は、
「新基準エコマーク認定」登録第1号を取得しました。



ECOS SG-456

資源を未来へ。



国内トップクラスの再生材比率、
CO₂削減率を達成したECOSの実力。

トップクラスの再生材比率 **77%** 優れたCO₂削減率 **-42%**

※再生材比率はタイルカーペット1㎡あたりの再生材比率(kg/㎡)です。
※CO₂削減率は当社従来品との比較です。
※ECOS SG-400・SG-300シリーズの数値です。



ECOS SG-451

【製造】 住江織物株式会社
542-8504 大阪市中央区南船場3-11-20

【販売】 株式会社 スミノエ
550-0013 大阪市西区新町2-4-2 ■ 西日本開発部 06(6537)6317
<http://suminoe.jp/interior>

www.dhtd.co.jp



**高効率・クリーン・コンパクトな
ガスタービン発電装置で
都市の電力需要に応えます。**

DAIHATSU ダイハツディーゼル株式会社

〒531-0076 大阪市北区大淀中1丁目1番30号 (梅田スカイビル タワーウエスト18F)
TEL (06) 6454-2390 FAX (06) 6454-2682

さまざまな建築物に合わせて
確実な施工で対応致します。



株式会社大協建材

<http://www.daikyo-kenzai.com/>

大阪本社 〒556-0016

東京本社 〒135-0042

大阪市浪速区元町1-13-7 大協ビル
TEL 06(6649)4105 / FAX 06(6633)4169
東京都江東区木場2-8-3 CN-2 BLDG.2階
TEL 03(5809)8171 / FAX 03(5809)8174

私達が目指すのは信頼です。



■新築事業

シーリング、防水、止水、美装、シリコンガasket接着
塗装・吹付、点字紙・障害者設備、金属、免震

■リニューアル事業

各種調査・診断、外壁修繕、美装・復元



高橋カーテンウォール工業株式会社
TAKAHASHI CURTAIN WALL CORPORATION

本 社 営 業 〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 3-2-15
TEL 03-5202-0700 FAX 03-5202-0710
大 阪 支 店 〒530-0005 大阪市北区中之島 3-2-18
TEL 06-6441-3211 FAX 06-6441-7911
アクア施設部 〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 3-2-15
TEL 03-5202-0720 FAX 03-5202-0721

E-mail: eigyou@t-cw.co.jp HP: <http://www.t-cw.co.jp>

PCカーテンウォールの設計・製造・施工

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

省エネルギーが
新しいエレベーターの扉を
ひらきます。

SPACEL-GR
東芝マシナームレスエレベーター<スぺーセルGR>

ENERGY SAVING (省エネルギー)

消費電力最大50%削減!^{*}

※回生電力機能(有償付加仕様)を採用した、乗用15人乗り105m/min(STD天井相当)と従来機種との比較(弊社調べ)

NEW DESIGN (新デザイン)

全機種LED照明を採用!

SAFETY&COMFORT (安全・安心・快適)

安全性・安心感の向上!

東芝エレベータ株式会社 関西支社

〒550-0004 大阪府大阪市西区御本町1-11-7 TEL.06-6445-3110 <http://www.toshiba-elevator.co.jp/>

グランフロント大阪 北館
タイル工事施工

ナレッジキャピタル



東陽商事株式会社

TOYOSHOZI CO.,LTD.

〒543-0075 大阪府大阪市天王寺区夕陽丘町1-52

TEL: 06-6775-5357 FAX: 06-6775-5358

<http://www.ts-tile.co.jp/>

— モットー —
真心こめて より良い仕事を
ムダをなくして 安全に！



左官工事
南晃工業株式会社

〒571-0065 大阪府門真市垣内町 16-21

TEL 06-6901-1381 FAX 06-6901-1580

URL <http://www.nankokogyo.co.jp/>



床テラゾー工事



**PERMASTEELISA
CREATES
THE FUTURE**

パルマスティールザグループは四大洲27カ国に60あまりのグループ会社を持ち、世界の近代建築にカーテンウォールとインテリアを納めています。グローバルネットワークを活かした、デザイン・エンジニアリング・プロダクションのシステムは国際的に高く評価されています。



パルマスティールザ・ジャパン株式会社 PERMASTEELISA JAPAN K.K.

〒102-0076 東京都千代田区五番町12-1番町会館4階 TEL.03-5275-8420 FAX.03-5275-8411

www.permasteelisagroup.com

HIRATA TILE

創意と情熱と技術をもってユニークな企業として建築文化に貢献します。

株式会社 **平田タイル**

代表取締役会長兼社長 平田雅利



ISO9001:2008
認証取得
登録証番号:
JQA-QM4721

本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座 1-1-10 TEL.06-6532-1231 FAX.06-6532-0923
タイル工務部 〒550-0011 大阪市西区阿波座 1-1-10 TEL.06-6532-2401 FAX.06-6532-2410

総会

定時総会

6月19日(水) 15:10~16:00

東天紅朱雀の間

出席者 香西会長ほか

議 事 (1) 平成24年度事業報告
(2) 平成24年度決算報告
(3) 平成25年度事業計画
(4) 平成25年度収支予算
(5) 役員、顧問選任

報 告 支部規程、財務規程

理事会

第1回通常理事会

6月19日(水) 14:00~14:50

東天紅朱雀の間

出席者 香西会長ほか

議 事 (1) 平成24年度事業報告
(2) 平成24年度決算報告
(3) 平成25年度事業計画
(4) 平成25年度収支予算
(5) 役員、顧問選任
(6) 支部規程、財務規程

第1回臨時理事会

6月19日(水) 16:20~16:30

東天紅鳳凰の間

出席者 香西会長ほか

議 事 (1) 役付役員選任
(2) 常任理事ならびに常設委員長委嘱
(3) 理事の会務分掌

評議員会

6月10日(月) 15:05~15:50

OMM2階6号会議室

出席者 三木議長ほか

議 事 (1) 評議員会副議長互選
(2) 役員、顧問推薦

報 告 平成24年度事業報告、平成24年度決算報告、平成25年度事業計画、平成25年度収支予算

講演会

6月19日(水) 16:50~17:50

東天紅朱雀の間

講 師 白波瀬智幸

演 題 「都市の中の森(大阪木材仲買会館)」

参加者 58名

表彰式・会員交流懇親会

6月19日(水) 18:00~20:30

東天紅コンフィデンシア

表彰式 (1) 第12回「建築と社会」賞
(2) 青年技術者 23名

会員交流懇親会 参加者 120名

編集委員会

第3回編集・広告企画合同委員会

6月12日(水) 17:30~19:00

日本建築協会会議室

出席者 米井委員長ほか6名

議 事 (1) 7月号特集「第60回青年技術者」
(2) 8月号特集「グランフロント大阪」
(3) 9月号特集「素材としての

建築—表現文化を通して建築を見る」

(4) 10月号特集「いま、建築技術者に求められること」

(5) 11月号特集「(仮) 木を考える」

(6) 12月号特集号「実験」

第3回構造分科会

6月7日(金) 18:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 角田幹事ほか3名

議 事 (1) 構造の頁の企画
(2) 12月号特集の企画

第3回施工材料分科会

6月18日(火) 17:30~19:00

日本建築協会会議室

出席者 藤丸幹事ほか3名

議 事 (1) 11月号特集の企画

第3回法令分科会

6月26日(水) 15:00~17:15

日本建築協会会議室

出席者 吉岡幹事ほか4名

議 事 (1) 法令コーナーの企画

第2回作品作風小委員会

6月27日(木) 19:00~19:50

日本建築協会会議室

出席者 稲垣和江小委員会委員長ほか3名

議 事 (1) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(2) gallery掲載報告・予定

事業委員会

第2回U-35準備委員会

6月13日(木) 19:00~21:00

大建設会議室

出席者 駒井幹事他9名

議 事 (1) 委員会の今後の活動について
(2) 企画アイデアの検討

出版委員会

第3回出版委員会

6月20日(木) 18:00~19:10

住まいの研究室

出席者 井上委員長ほか7名

議 事 (1) 進行中のテーマについて

特別委員会

関西の建築界／第48回群像(インタビュー)

6月7日(金) 15:00~18:00

Teo 建築設計事務所

出席者 三矢委員ほか2名

インタビュー 小澤丈夫 氏

関西の建築界／第49回群像(インタビュー)

6月27日(金) 15:00~19:30

WIZ ARCHITECTS

出席者 三宗委員ほか5名

インタビュー 吉井歳晴 氏

第1回史料研究会

6月25日(火) 18:00~20:00

出席者 山形委員長ほか5名

議 事 (1) 今後の連載企画の検討

第3回10年委員会

6月13日(木) 18:30~20:00

日本建築協会会議室

出席者 設楽委員長他5名

議 事 (1) 学生のための見学会
(2) 大阪そうせいプロジェクト

編集委員会(平成25年度)

■副会長

設楽 貞樹

本多 友常

■編集担当理事

浅野真一郎

佐藤 榮一

竹中 統一

立成 良三

松村 孝治

三柴 利雄

吉村 英祐

◎米井 寛

■副委員長

勝山 太郎

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

高橋 和也

田中 直人

不動 剛志

紅谷 昇平

松田奈緒子

三宅 次郎

△守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

荒木 宏之

△大西 広朗

静 茂夫

下坂 浩和

野田 隆史

橋本 祐典

三谷 帯介

矢野 展寛

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅

川合 隆之

黒柳 亮

森岡 拓也

酒井 雅男

谷垣 浩一

塚口真佐子

ベリー史子

△間瀬 一博

■構造分科会

秋田 智

石田 大三

岸本 光平

小芝 淳一

志摩 好宣

瀧野 敦夫

△角田 耕一

橋本 宗明

松村 健

向井 洋一

◎委員長 ○副委員長

▲小委員会委員長 △幹事

(順不同)

■設備分科会

赤澤 正治

岩城 憲治

梶井 宏修

北野 勝也

樺田 輝生

夏井 重行

野崎 正二

△橋本 直樹

福谷 周

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

村上幸三郎

■施工材料分科会

荻渠 友貴

桜井 和男

高橋 秀一

中野 敬史

△藤丸 啓一

渡邊 聡

■法令分科会

岩見 吉剛

河野 学

小松 輝樹

△吉岡 忠

平山 英

井上 久明

田中 幸夫

■作品作風小委員会

居内 章夫

池上 明

▲稲垣 和江

井上 雅祐

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉橋 尉仁

倉淵奈千子

澤田 純一

輦野 淳司

豊田 充広

鳥居 久人

西田 佳代

芳谷 晴彦

増田 敬彦

■広告企画小委員会

大谷 金由

小川 雄介

小山 昭

権代 晃

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

印刷 2013年7月26日

発行 2013年8月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 藤中島弘文堂印刷所

定価 1200円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

電気工事・空調工事・水道衛生工事・消防施設工事
および機械器具設置工事の設計、監理、施工

タイダン株式会社

本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話 (06) 6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話 (03) 3261-8231
支店 札幌・仙台・新潟・さいたま・横浜・豊田・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・福島・山形・前橋・宇都宮・土浦・千葉・
長野・松山・静岡・刈谷・津・岐阜・富山・福井・和歌山・東近江・山口・
松江・松山・高知・徳島・宮若・鳥栖・長崎・大分・宮崎・鹿児島・那覇
海外支店 シンガポール・ホンコン・マニラ (フィリピン)・ベタリンジャヤ (マレーシア)
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話 (0492) 58-1511

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧にに対応できるように

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 **中島弘文堂印刷所**

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765
東京事務所 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1丁目9番地ニュー御茶ノ水ビル601号
TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社 **日本電気化学工業所**

<http://nacl.jp> E-mail: nacl@nacl.co.jp

本郡営業所 〒560-0038 大阪府豊中市里池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06) 6843-1235(代) FAX (06) 6853-1832
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03) 3882-0978(代) FAX (03) 3882-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KENGYO KASEIRINGU KAISHA

高性能膨張材

デンカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材
(タスコン)
 - ・躯体防水材
(シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

金森藤平商事株式会社 大阪営業所
〒561-0817 大阪府豊中市浜 1 丁目 1 番 7 号
TEL 06-6332-6861 FAX 06-6332-6884

小浦産業株式会社
〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町 1 丁目 14 番 6 号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

ポンプで省エネまるわかり！ ポンプde省エネ講習会実施中

なかなか知られていないポンプでの省エネ。

当社では無料の「ポンプde省エネ講習会」を開催し、「本当にポンプで省エネできるの?」、「ポンプの省エネはインバータで終わりじゃないの?」など、お客様の疑問にお応えしています。年間約650名のお客様がポンプによる省エネ効果を実感・納得されており、大変ご好評を頂いています。



大好評「ポンプde省エネ講習会」のご案内

先着 15名様限定

<会場・日時> (実機ポンプの運転は、大阪会場のみとなります)

- ・大阪会場：西島製作所 本社（大阪府高槻市）
9/12、9/26※、10/24※（9:30～16:30）
（※の日付は、ポンプの分解・メンテナンス講習あり）
- ・東京会場：西島製作所 東京支社（東京都品川区）
9/19（13:30～17:00）

- ・名古屋会場：西島製作所 名古屋支店（名古屋市中区）
9/5（13:30～17:00）
- ・九州会場：西島製作所 九州支店（福岡市中央区）
8/29、10/3（13:30～17:00）

無料!

ご興味のある方は、ecopump@torishima.co.jp まで。

メールには会社名、お名前、ご連絡先を記入いただくほか、「広告No.17」と記入いただけますようお願いします。

WEBサイトからも申し込みいただけます。

株式会社 西島製作所

トリシマは、世界一省エネにこだわるポンプメーカーです。

「名古屋城本丸御殿復元の概要とよもやま&苦労話」 講演会 開催のご案内

名古屋市では、本丸御殿の復元工事を3期に分けて進めています。平成21年（2009）1月から着手し、平成28年（2016）には対面所等が完成、平成30年（2018）には、將軍上洛の際の居館として建てられた上洛殿など全ての建物が完成する予定です。

この度、第1期工事である玄関・表書院復元の完成に伴い、平成25年5月29日から一般公開が開始されました。そこで本講演では、復元工事に携わっている方々に本丸御殿復元の概要と、よもやま苦労話などを講演していただきます。名古屋城本丸御殿復元に関心のある方々には、思いもよらない、素晴らしい話が聞けるかもしれません。ぜひご参加ください。

■日 時 2013年10月3日（木）13:30～15:40

■参加費 無料

■会 場 名古屋市中小企業振興会館
(吹上ホール) 4階第3会議室

■定 員 140名 (申込先着順)

■締切り 2013年9月27日（金）

■講 師 吉原一彦氏／安藤ハザマ・松井・八神特別共
同企業体所長
魚津源二氏／(株)魚津社寺工務店会長

■主 催 建築八団体連絡会
(日本建築協会東海支部加入)

申込みは、東海支部ホームページから参加申込書をダウンロードして愛知建築士会までFAXで。

FAX 052-261-0251

TAKENAKA

守る、 創る、 思いやる ビルへ。



野坂徹夫：画

災害から人々の暮らしを守る。
エネルギーを創り、分けあう。
都市を、そして地球を思いやる。
これからのビルはこうじゃないとね。

想いをかたちに

 竹中工務店